

Title	魯迅年譜
Author(s)	中川, 俊
Citation	大阪外国語大学学報. 15 p.73-p.128
Issue Date	1965-02-15
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80243">https://hdl.handle.net/11094/80243</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 魯 迅 年 譜

中 川 俊

## 前 言

我們可以認為日本的近代文学的兴起大致是在明治維新以后，然而在中国新的文学的开端却是比日本后起了三十年。一九一六年陈独秀主編的「新青年」发刊以后，才迈开了文学革命的第一步。陈独秀，胡适他們抱有反封建的明確的意志，进行反对旧文艺。从这时候起，欧洲文化从十九世紀到二十世紀之間所产生的各种各样的思潮推波助瀾地流进中国文化里面来，促进中国的新兴知识份子的都市化和近代化。

文学革命的精神本来就是反对封建主义，然而他們通过反对封建主义的斗争，漸漸明確地認識到封建主义的后面还有一个控制他們的政治力量。那就是政治上經濟上維護和支持国内封建陣營的阿片战争以来的外国帝国主义势力。在这种情况下面，他們須要一面对頑固的国内反动派进行斗争，一面对帝国主义的进攻也展开激烈的斗争。一九二五年在上海爆发了「五卅」运动以后，反对封建主义的同时，反对帝国主义的傾向更加明显了。凡是在这个时期起了一定的作用經得起風雪的文学作品，無論創作或理論都是思想性斗争性很強烈的作品，而且具有对现实社会的尖銳的批評性。中国文学的开端虽然比日本文学后起了三十年，但是在这与日本文学並進的時間内，他們却創造了一些什么样的新的内容呢？这是一个重要的問題。

魯迅的杂感集有一本集子叫「墳」。新文化运动的黎明时期，指导青年的領袖們，都为自己要建築一座宝塔，把自己高高地供在里面。而魯迅却做一个墳，把自己的过去埋葬在这里面。希望把这詛咒的时代很快地过去。他自己以为（他）「只不过是桥梁中的一木一石，並非什么前途的目標，範本。應該和光陰偕逝，逐漸銷亡。（「写在「墳」后面」）。然而他这桥梁「才是真正通达到彼岸的桥梁」，他的作品才成了「中国新文学的第一座紀念碑」（瞿秋白編「魯迅杂感选集」序言）。

我現在編一种以作品为主的魯迅年譜。世上已有許多种魯迅年譜，但是向来没見过以作品为主的。我希望我这小小的工作能够供給研究魯迅文学的人們一个参考。

---

日本の近代文学のおこりを明治維新以後とするならば、中国ではその動きは、さらに約三十年おくれてはしまっている。一九一六年「新青年」が発刊されて、文学革命の第一歩をふみ出し、陳独秀、胡適たちは反封建の自覚の上になって、旧文芸に反対した。これより西欧が十九世紀か

ら二十世紀にかけて、約百年間に歩んできた思潮が渦をなして、一時に中国文化界に流れこみ、新興インテリゲンチァの都市化と近代化をあわただしく促進することになった。

文学革命の精神は反封建にあったが、反封建を徹底させようとするほど、その背後にある権力があきらかになってきた。それは国内の封建勢力を政治的に経済的に支援し、維持しているアヘン戦争以来の外国の帝国主義である。こうして中国文学は、根強い伝統による国内の反動と斗いながら、一方では帝国主義の侵略とも斗わねばならず、一九二五年の五卅事件の頃から、反封建と同時に反帝の傾向を強くしていったのである。凡そこの時期に、一定の作用を果し、風雪に耐え得る文学作品は、創作、理論をとわず、すべて思想性斗争性の大へん強い作品であり、現実社会に目をひらいた批判性をもっていた。日本より数十年たちおくれで出発した中国が、日本の近代化と並行しつつどのような文学を形成していったのであろうか。

魯迅の雜感集に「墳」という作品がある。新文化運動のおこるとき、青年たちの指導者になろうとするものは、自ら宝塔をつくって、自分自身をその中に高くまつりこもうとした。ところが魯迅は墓を掘って、その中に自己の過去を埋葬し、こののろわれた時代が早く過ぎ去るようにとねがった。「墳」のなかで自分自身のことにふれて書いている：

（私は）「せいでい橋梁の一本の木一つの石でしかなく、前進の目標や手本などといえるものではない。時間とともにしだいに滅びて行くものなのだ。」

ところがこの「橋梁」が「彼岸にわたりつくことのできた橋」となり、その作品が「中国新文学最初の記念碑」（瞿秋白編「魯迅雜感選集」序言）となったのである。

魯迅の年譜は、これまでに日本でも中国でも数種のもが出ていて、それぞれにすぐれた点もっている。こゝに作った年譜は、作品年表を主体としており、事項はそれら作品内容の理解の一助になればと思っている。なお引用個所で必要と思われる事項には、その出典を明示した。

この年譜作成は機械的ともいえる操作によるものであり、これをもって多くの貴重な紙面をさくことの不適格が省みられたが、作品年表を主とした年譜のこゝろみは、わたくしのみる限りでは、これまでになかったように思われるので、敢えて発表させていたゞいた。なお不全未熟な点が少なくないと思われる。この機会に先生方の御教示をいたゞければ幸である。（1964.9.22）

---

「作品」の排列は執筆年月日の順にしたがっている。

執筆年月日の記載がない場合は発表された年月日によっている。発表された年月日は、題名の後に（ ）でかこんで示す。

「書名」は単行された書名を略記で示す。

評論	集外	集外集
	集外附	集外集附录
	集拾	集外集拾遺
	集拾附一	集外集拾遺附录一
	集拾附二	集外集拾遺附录二
	墳	墳
	熱風	熱風
	華蓋	華蓋集
	華綾	華蓋集綾編
	華綾綾	華蓋集綾編的綾編
	三閑	三閑集
	而已	而已集
	二心	二心集
	南腔	南腔北調集
	偽自	偽自由書
	准風	准風月談
	花邊	花邊文學
	且介	且介亭雜文
	且介二	且介亭雜文二集
	且介末	且介亭雜文末編
	且介末附	且介亭雜文末編附集
小說	吶喊	吶喊
	彷徨	彷徨
	故事	故事新編
散文詩	野草	野草
回想	朝夕	朝花夕拾
論文	全 8	魯迅全集第八卷（1957年人民文學出版社）
書信	兩地	兩地書
	書信	書信（魯迅全集第九卷，第十卷所收）
翻譯	譯一	魯迅譯文集一（1958年人民文學出版社）

譯十	魯迅譯文集十（1958年人民文学出版社）
その他 旧全8	（1938年魯迅先生紀念委員会編）魯迅全集第八卷
旧全20附	（1938年魯迅先生紀念委員会編）魯迅全集第二十卷附录
旧全補	（1946年 唐弢編） 魯迅全集補遺
旧全補続	（1952年 唐弢編） 魯迅全集補遺続編
旧全補続附	（1952年 唐弢編） 魯迅全集補遺続編附录

#### 「種類」

- I 小説，詩，散文詩，回想記など
- II 評論，文学史，著作，編輯校訂された作品（中国小説史略，汉文学史綱要など）
- III 翻譯，その序文，后記など
- IV 画集，木版画集などの序文
- V 書信
- VI その他（中国鑛産志，生理学の講義案など）

書信は人民文学出版社1958年版「魯迅全集」第九卷，第十卷のものをとり，「魯迅書簡」（許广平編人民文学出版社，1952年版上・下）にある一部書信はふくまれない。

#### 「翻譯」

題名の後に（ ）でかこみ，三種に書きわけて異なる場合を示す。

（ルナチャルスキー作）	魯迅譯
（ルナチャルスキー作 易嘉譯）后記	翻譯は易嘉，后記が魯迅
（ルナチャルスキー作 署邓当世譯）	邓当世の筆名を用いた魯迅譯

#### 参 考 と し た 資 料

「魯迅全集」※ 一卷～十卷	人民文学出版社	1958年
および各巻巻末註釈		
「魯迅譯文集」一卷～十巻	人民文学出版社	1958年
「魯迅日記」上・下巻	人民文学出版社	1959年
「魯迅全集」※ 一卷～二十巻	魯迅先生紀念委員会編	1938年
「魯迅全集補遺」	唐弢編	1946年
「魯迅全集補遺続編」	唐弢編	1952年
「魯迅——他的生平和創作——」	王士菁著 中国青年出版社	1958年
「魯迅傳」	王士菁著 新知書店出版	1949年

「魯迅回憶錄」	許广平著 作家出版社	1961年
「魯迅の故家」	周遐寿著 大通書局	1953年
「魯迅先生年譜」	馮雪莖著「魯迅散論」所収	1951年
「魯迅先生年譜」	許寿裳著「魯迅全集」第20卷所収	1938年
「中国新文学史稿」	王瑤著 新文芸出版社	1954年
「魯迅杂感選集」	瞿秋白編録并序 上海出版公司	1950年
「魯迅年譜」	竹内好他編 岩波書店刊「魯迅案内」所収	1956年
「魯迅業績年表」	志賀正年著 天理大学学報	1954年
「魯迅研究」	魯迅研究会編	1953年創刊

#### その他

\* 魯迅先生紀念委員会編「魯迅全集」（許广平主編）二十卷および「全集補遺」「補遺続編」

1938年、秘密出版機関「復社」の手で出版されたといわれる。この全集には創作、評論の他に、それらを量的にはるかに越える翻訳作品が輯録され、さらに編輯校訂された作品も輯録されている。が書信（兩地書を除く）はふくまれていない。

\* 人民文学出版社編「魯迅全集」十卷

1956年から1958年にかけて刊行され、新たに詳細な注釈が加えられた。この版の全集には創作、評論と文学史著作などを収め、翻訳された外国の作品、編輯校訂された作品はふくまれていない。が第九卷（後半）と第十卷に新たに書信が加えられ、さらに第八卷卷末附録に「中国小説の歴史の変遷」が新たに加えられた。この講義録は1938年出版の「魯迅全集」にも「魯迅三十年集」にも未発表のもので1957年にはじめて「收穫創刊号」に発表されたものである。

翻訳された外国の作品については1958年「魯迅譯文集」十卷となって刊行された。編輯校訂の作品は別に整理を行い出版される予定である。

他に「魯迅日記」二卷が1959年刊行されている。

魯迅先生紀念委員会編「魯迅三十年集」計三十冊

1941年出版。「三十年集」の名は1906年から1936年に至る30年間の魯迅の著述すべてを輯録するというところにある。許广平が記した「魯迅三十年集印行經過」によると、この集はすでに1936年魯迅が自ら編輯刊行を試みられたのであったが病に倒れついに果されなかったということであり、作品の排列は執筆年代にしたがって、第一冊は「會稽郡故書雜集」からはじまっている。書信（兩地書を除く）および翻訳作品はふくまれていない。

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
				<p><b>1881年</b>（光緒7，明治14）</p> <p>9月25日浙江省紹興縣城内東昌坊口にうまれる。長男。姓は周，名は樹人，字は豫才，幼名は樟寿といった。「魯迅」とは三十七才のとき，「新青年」誌上に小説を発表したとき用いた筆名である。</p> <p>家長であった祖父介孚公は進士，父伯宜公は秀才，母方の父魯希曾は舉人で，読書人の家柄。また四，五十畝（約三万平方メートル）の水田があり，地主であった。</p> <p><b>1885年</b>（光緒11，明治18）四才</p> <p>二弟作人うまれる。</p> <p><b>1887年</b>（光緒13，明治20）六才</p> <p>塾に入り，祖父の従兄弟玉田につき「鑑略」を誦する。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」四）</p> <p><b>1888年</b>（光緒14，明治21）七才</p> <p>妹瑞うまれる。十カ月あまりで夭死。</p> <p><b>1889年</b>（光緒15，明治22）八才</p> <p>三弟建人うまれる。</p> <p><b>1892年</b>（光緒18，明治25）十一才</p> <p>三味書屋に通い，寿懷鑑（字は鏡吾，秀才）につき，経書など伝統的な学問の教育をうける。また絵のしきうつしに興味をもち，「山海經」「爾雅音圖」「毛詩品物図考」「点石齋叢画」「詩画舫」などの絵のある本を買いあつめる。（「朝花夕拾」所収「阿長与山海經」）</p> <p>よく母にともなわれ，母の里，安橋頭へ行く。農村の風物，農民との接触は後年に大きな影響をあたえた。「社戏」のなかに描かれているのは，この安橋頭一帯の景色である。（許寿裳「魯迅先生年譜」）</p> <p><b>1893年</b>（光緒19，明治26）十二才</p> <p>2月曾祖母（荅年，通称九太太）が七十九才で亡くなり，その喪に服するため，祖父福清（介孚）北京より帰る。</p> <p>秋，祖父が知人の子弟のために，科擧の試験官に特別のはからいを依頼したことが発覚し入獄。（一九〇一年にいたり出獄）</p>

執筆 年月日	書名	種類	題名	事項
1898年	集拾 附一 集拾 附一	III	夏剣生雑記	<p>しばらくの間、安橋頭皇甫莊（王府莊）の母方魯家の伯父（秀才）の家にあずけられる。（新知書店王士菁「魯迅傳」七）</p> <p>それから伯父の引越しにともない、小皋埠の義弟秦少漁のところに移る。こゝで紅樓夢や狭義ものなど、家ではみられなかった小説類を多く読む。（周遐寿「魯迅の故家」*娛園、）</p> <p>四弟椿寿うまれる。</p> <p>1894年（光緒20，明治27）十三才</p> <p>祖父のたびたびの裁判毎に田地を手放し、さらに冬から父が発病し、家は急速に傾く。（王士菁「魯迅傳」七）そして質屋と藥屋を往復する日がはじまる。（「呐喊」自序）</p> <p>1896年（光緒22，明治29）十五才</p> <p>この年から日記をつけはじめ、日本留学の前1902年頃に至り中断された。これらの日記は現在まだ発見されていない。（人民文学出版社「魯迅全集」所収 魯迅著訳年表）</p> <p>10月，父死去。年三十六</p> <p>1897年（光緒23，明治30）十六才</p> <p>家にいて読書に専念する。「板橋全集」「酉陽雜俎」「古詩源」「古文苑」「文朝文繫」「二酉堂叢書」などを読む。</p> <p>この頃家が貧しいため、近隣の人から、さげすみの冤罪をうける。（「朝花夕拾」所収 *瑣記、）</p> <p>1898年（光緒24，明治31）十七才</p> <p>4月南京へ行き、江南水師学堂（給費）機関科に入学。学監の椒生は祖父の従兄弟にあたり、古文を教えていた。（周遐寿「魯迅の故家」椒生）半年ばかりいたが、心に満たず、家に帰る。（「朝花夕拾」所収 瑣記）郷里で一度県試をうける。（岩波「魯迅選集」別巻所収年譜）</p> <p>1899年（光緒25，明治32）十八才</p> <p>1月ふたたび南京へ出て、江南陸師学堂付設の鮑務鐵路学堂に入学。はじめて物理</p>



執筆年月日	書名	種類	題名	事項
1900年 2月	集拾 附一	I	別諸弟三首 庚子二月	<p>数学、地理などの学問に接するとともに、西洋近代思想にふれる。たとえばハックスリー「進化と倫理」、ソクラテス、プラトーン、ストイックなど。梁啓超主宰の雑誌「時務報」「訳書彙編」を耽読する。（「朝花夕拾」瑣記）</p> <p>1900年（光緒26，明治33）十九才</p>
	集拾 附一	I	蓮蓬人	
1901年 2月	集拾 附一	I	庚子送灶即事	
18	集拾 附一	II	祭書神文	<p>1901年（光緒27，明治34）二十才</p> <p>8月弟，作人江南水師学堂に入学。</p>
3月	集拾 附一	I	惜花四律 步湘州藏春园主人韵	
4月	集拾 附一	I	別諸弟三首 辛丑二月并跋	
12月	集拾 附一	I	輓丁耀卿联	<p>1902年（光緒28，明治35）二十一才</p> <p>1月鉞路学堂を卒業。</p> <p>3月江南督練公所から派遣されて日本に留学。</p> <p>4月東京牛込西五軒町の弘文学院速成科に入学。</p>
1902年 6月	集拾 附一	I	自題小像（1901年2月から1902年2月の間）	
		II	題照贈仲弟	
1903年	集拾	II	中国地質略論（載10月「浙江潮」）	<p>1903年（光緒29，明治36）二十二才</p> <p>梁啓超編集の雑誌「新小説」を続けて購読。</p> <p>留学生雑誌「浙江潮」に「中国地質略論」他二篇の文章を寄稿する。</p> <p>この頃弁髪をきる。（周遐寿「魯迅小説里の人物」剪髮）</p> <p>夏 休暇に帰国。</p> <p>1904年（光緒30，明治37）二十三才</p> <p>4月宏文（弘文改め）学院速成科を卒業（志</p>
	集外	II	斯巴達之魂（載6月11月「浙江潮」）	
	集外 譯一	III	説鉛（載10月「浙江潮」） 「月界旅行」及辨言（フランス，ベルヌ作）	

執年 年月日	筆 書名	種 類	題 名	事 項
1906年 3月29	譯一	Ⅲ	「地底旅行」(フランス、 ベルヌ作)	賀正年「魯迅業績年表」) 7月祖父死去。六十七才。 9月仙台医学専門学校に入学。(無試験、 授業料免除)。藤野先生の講義をきく。 (「朝花夕拾」藤野先生)
4月11	全補続	Ⅵ	中国鉱産志(顧琅共纂)	1905年(光緒31, 明治38)二十四才 休暇に東京へ出る途中、水戸の朱舜水の 遺蹟を訪う。
1907年	墳	Ⅱ	人之历史(載1907年12月 「河南」)	1906年(光緒32, 明治39)二十五才 3月仙台医学専門学校を止め、仙台を去る。 (「呐喊」自序)
	墳	Ⅱ	科学史教篇(載1908年6月 「河南」)	7月帰国、母の懇請により山陰の朱女士(名 は安)と結婚。弟作人をとめない再び渡 日。東京本郷区湯島二丁目伏見館に住み 文学の研究に専心。
	墳	Ⅱ	文化偏至論(載1908年8月 「河南」)	1907年(光緒33, 明治44)二十六才 春 本郷一丁目の中越館に移る。
	墳	Ⅱ	摩羅詩力説(載1908年2月、 3月「河南」)	夏 作人、許寿裳らと文芸雑誌「新生」の 出版を企画したが失敗。(「呐喊」自序) 留学生雑誌「河南」に「摩羅詩力説」を 書く。個性の解放、思想の自由を主張。
	譯十	Ⅲ	「紅星佚史」譯詩(周遼譯 「紅星迭史」より)	秋 許寿裳らと神田のコンテ夫人につきロ シア語を学ぶ。のち、経済的につづかず 中絶。(王士禛「魯迅傳」十六)
1908年	譯十	Ⅲ	「裴象飛詩論」(ハンガリ ー Reiche E. 著)	1908年(光緒34, 明治41)二十七才 4月本郷西片町の元漱石宅に許寿裳、作人 らと移転。「伍舍」と名づける。(周遐 寿「魯迅の故家」伍舍)
	集拾	Ⅱ	破惡声論(載12月「河南」)	許寿裳、作人、朱希祖、錢玄同らと民報 社に通い、章太炎(炳麟)について「説 文」を学ぶ。 「光復会」に加入した。(許寿裳「魯迅 先生年譜」) ドイツ語学協会のドイツ語学校に籍をお き許寿裳とともにドイツ語を学ぶ。(王 士禛「魯迅傳」十六) 作人と共同で「域外小説集」の諸作品を 翻訳する。(魯迅はアンドレーエフとガ

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
1909年				ルシンを訳す。）
1月15	譯一	Ⅲ	「域外小説集」（周作人と共訳、魯迅訳はアンドレフ、ガルシン）及序言	1909年（宣統1，明治42）二十八才
	譯十	Ⅲ	「鑑台守」譯詩（「域外小説集」より）	8月帰国。杭州浙江兩級（高級と初級）師範学堂の生理学と化学の教員となり、この外に生物学科の日本語の通訳を担当する。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
8月	旧全補続集拾	Ⅵ	「人生象学」	
		Ⅲ	「勁草」譯本序（残稿）	
1910年				1910年（宣統2，明治43）二十九才
10月14	書信	Ⅴ	許寿裳一	5月祖母蔣氏死亡。六十八才。その葬式を司る。
11月20	書信	Ⅴ	許寿裳二	夏 杭州を去り紹興に帰る。 紹興府中学堂の生理学の教員兼教務長となる。 魯迅のザンギリ頭は紹興知府（満州人）の注意をひき、同僚にも敬遠されていた。この頃六人の学生が魯迅の制止をきかず辮髪を切り除名される。（王士菁「魯迅傳」十九） 余暇に植物採集をつづけ、「釈草小記」「南方草木状」（中国古代の植物学の著作）を抄録。 会稽の古代歴史と地理逸文および唐以前の小説を蒐録。後の「会稽郡故書雜集」と「古小説鈎沈」となる。
1911年				1911年（宣統3，明治44）三十才
	集拾	Ⅱ	辛亥游录（載1912年2月「越社丛刊」）	夏 紹興中学堂を辞職。
	集拾	Ⅰ	怀旧（載1913年4月「小説月報」）	11月紹興光復。山会初級師範学校校長に任ぜられる。（人民文学出版「魯迅全集」所収著訳年表）友人范愛农を招いて、教務長兼教員とする。
3月14	書信	Ⅴ	許寿裳 三	軍政府を批判攻撃する学生新聞は、魯迅の制止をきかず、王金堯より贈与金を受けとる。魯迅辞任して去る。（「朝花夕拾」范愛农）
3月22	書信	Ⅴ	許寿裳 四	
7月11	書信	Ⅴ	許寿裳 五	
1912年				1912年（民国1，大正1）三十一才
	集拾	Ⅱ	「越鐸」出世辞（載1月3日「越鐸日報」）	1月南京に臨時政府成立し、教育総長となった蔡元培に招かれ、南京に出て教育部

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
1913年	旧全補	II	古小説鈎沈序（周作人名義、載「越社丛刊」第一集）	部員となる。
	集外	I	哀范君三章（載8月21日紹興「民興日報」） この日から又「日記」を死の前日まで、避難、重病などの事故による外、ずっと書きつづけられる。	余暇に龍蟠里図書館に行き唐宋短篇小説を輯録。（後ひきつづき輯録、校訂が加えられ「唐宋傳奇集」となる。
				5月北京遷都にともない、北京宣武門外紹興会館内の藤花館に住む。
				教育部社会教育司第一科科长（図書館、博物館、美術館などの主管）となる。
				8月教育部僉事に任ぜられる。 「謝承后汉書」を照合編纂。（翌年完成）
1913年	集拾	IV	擬播布美術意見書（載2月「教育部「編纂处月刊」）	1913年（民国2，大正2）三十二才
8月	譯十	III	「艺术玩賞之教育」（上野阳一著）	2月教育部から読音統一会会員として招聘される。（人民文学出版「魯迅全集」第十卷所収 魯迅著訳年表）
10月	譯十	III	「社会教育与趣味」（上野阳一著）	6月休暇に帰省。
11月	譯十	III	「兒童之好奇心」（上野阳一著）	8月帰京。 嵇康（六朝の詩人）の詩文集の照合編纂。年末完成。
1914年	譯十	III	Heine 的詩（載2月1日「中华小説界」）	1914年（民国3，大正3）三十三才 この年から余暇に仏学經典の研究をはじめた。
1915年	旧全8	II	会稽郡故書杂集（編録校勘周作人名義で出版）	1915年（民国4，大正4）三十四才 1月「百喻經」木版一卷を自費出版。金石拓本の蒐集研究をはじめめる。
1916年	集拾	II	「蛻龕印存」序（代）	1916年（民国5，大正5）三十五才 5月紹興会館内の补树書屋に移転。
12月9	書信	V	許寿裳 六	12月休暇をとって帰省。 碑文拓本の蒐集，研究をつづける。
1918年				1917年（民国6，大正6）三十六才 4月周作人を郷里から迎える。
3月10	書信	V	許寿裳 七	7月張勳の復辟運動がおこり，辞職する。 乱がおさまるとともに復職。（人民文学出版社「魯迅全集」所収著訳年表） 中国古代の造象墓志など金石拓本を蒐集研究し，後に「六朝造象目録」と「六朝墓志目録」（未完）となる。（人民文学出版社「魯迅全集」第一卷呐喊自序注釈） 1918年（民国7，大正7）三十七才 5月「新青年」四卷五号に魯迅の筆名で「狂

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
4月	呐喊	I	狂人日記	人日記」を發表，ひきつづき「呐喊」に収められる一連の作品をつぎつぎに書く。 拓本研究をつづける。
	集外	I	夢（載5月「新青年」）	
	集外	I	愛之神（載5月「新青年」）	
	集外	I	桃花（載5月「新青年」）	
	集外	I	他們的花園（載7月「新青年」）	
	集外	I	人与時（載7月「新青年」）	社会と時事に関する短評を「随感録」と題し，「新青年」誌上につぎつぎ發表， 文学革命の基礎の第一歩をかためた。 （王瑤「中国新文学史稿」上第一章从文学革命到革命文学）
6月11	集拾	IV	南齊「呂超墓志」跋	
7月	墳	II	我之節烈觀	
	熱風	II	隨感録二十五	
	熱風	II	隨感録三十三	
8月20	書信	V	許壽裳 八	1919年（民国8，大正8）三十八才
11月4	集外	II	渡河与引路	
	熱風	II	隨感録三十五，三十六，三十七，三十八	
1919年	熱風	II	隨感録三十九，四十，四十一，四十二，四十三	
	熱風	II	隨感録四十六，四十七，四十八，四十九	
	集拾	II	什麼話（三）（載2月「新青年」）	8月北京西直門内公用庫八道灣十一号に家を買う。（「魯迅日記」）
3月	呐喊	I	孔乙己	
2	集拾	II	拳术与 拳匪、	
	熱風	II	隨感録五十三，五十四	
26	旧全	II	「孔乙己」文末附記	
	補続			
4月	集外	I	他（載4月「新青年」）	
	呐喊	I	葯	
	熱風	II	五十六 来了、	
	熱風	II	五十七現在的屠殺者	
	熱風	II	五十八人心很古	
	熱風	II	五十九 聖武、	
16	書信	V	傅斯年 一	
19	書信	V	周作人 一	
8月2	譯二	III	「一个青年的夢」（武者小路実篤著）譯者序	
10月	墳	II	我們現在怎样做父亲	
	熱風	II	六十一不滿	
	熱風	II	六十二恨恨而死	

執年 年月日	筆 日	書名	種類	題名	事項
		熱風	II	六十三 *与幼者。	
		熱風	II	六十四有无相通	
		熱風	II	六十五暴君の臣民	
		熱風	II	六十六生命的路	
11月24		譯二	III	「一个青年的夢」譯者序二	11月作人とその家族とともに移る。
1920年					12月故郷紹興の家を整理し、母たち家族を北京にむかえる。（「魯迅日記」）
2月25		譯二	III	「一个青年的夢」正誤	1920年（民国9，大正9）三十九才
3月20		譯一	III	「域外小説集」序（周作人名義）	秋から北京大学中国文学系で中国小説史を講義。1924年まで続く。この講義は「中国小説史略」と題して1923年に上巻翌年
5月4		書信	V	宗崇父 一	下巻が出版されたが1925年9月修正されて、合訂本として北新書店から出版。のち1930年にふたたび修正された。その後の各版は1930年版によっている。（人民文学出版社「魯迅全集」第八巻）
6月		呐喊	I	明天	北京高等師範学校の講師を兼任。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
		譯十	III	「察罗塔斯忒拉的序言」（ドイツ、ニーチェ著）	
7月		呐喊	I	一件小事	
10月		呐喊	I	頭髮的故事	
		呐喊	I	風波	
1921年					1921年（民国10，大正10）四十才
		譯一	III	「現代小説譯丛」（魯迅，作人，建人譯）	文学研究会の機関誌「小説月報」の主要寄稿者となる。
1月		呐喊	I	故郷	「故郷」を書いて、精神的麻痺状態にあって生活の重荷を担っている農民の典型閩土を描く。
3		書信	V	胡适 一	
4月15		譯一	III	「工人綏惠略夫」（ロシア，アルツィバーセフ作）及譯了「工人綏惠略夫」之后	
6月30		譯一	III	「三浦右衛門の最后」（菊池寛作）譯后附記	
7月		集拾	II	无題（載7月8日「晨報」）	
8月16		譯二	III	「狹的籠」（ソ聯，エロシエンコ作）譯后附記	
26		書信	V	宮竹心 一	
9月5		譯十	III	「近代捷古文学概観」（チエコ，カラセク著）及附記	
5		書信	V	宮竹心 二	
9		譯十	III	「小俄罗斯文学略説」（ドイツ，カールペレス著）及譯者記	
10		譯二	III	「池辺」（ソ聯，エロシエンコ作）譯后附記	
14		譯二	III	「春夜の夢」（エロシエンコ作）譯后附記	

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
10月	譯十	Ⅲ	盲詩人最近時の踪迹（中根弘10月22日「晨报副刊」署風声譯）	
16	集拾	Ⅲ	「坏孩子」附記	
23	熱風	Ⅱ	知識即罪惡	
11月4	熱風	Ⅱ	事实勝於雄辯	
10	譯二	Ⅲ	「魚的悲哀」（エロシエンコ作）譯后附記	
15	譯十	Ⅲ	「一篇很短的傳奇」（ロシア、ガルシン著）	
12月	呐喊	I	阿Q正傳	12月「阿Q正傳」を書いて、社会の最も下層にあって、反抗意識に缺けた浮浪性貧農の典型阿Qを描く。 この年も北京大学、北京高等師範学校の講師を兼任。（魯迅日記）
19	譯二	Ⅲ	「一个青年的梦」（武者小路実篤作）及后記	
1922年				1922年（民国11，大正11）四十一才
1月28	譯二	Ⅲ	「愛罗先珂童話集」及序	2月「学衡を量る」を書き、吳宓ら学衡派の復古主義提唱を攻撃、
2月	熱風	Ⅱ	估「学衡」（載2月9日「晨报副刊」）	
4月	譯十	Ⅲ	俄国約豪杰（載4月2日「晨报副刊」）	春 日本を追われたソ聯の盲目詩人エロシエンコを家に招き、夏まで止宿させる。
9	熱風	Ⅱ	为「俄国欧劇団、	
12	熱風	Ⅱ	无題	
5月1	譯十	Ⅲ	忆愛罗先珂華希理君——代序——（江口渙著）	
6月	呐喊	I	白光	
	呐喊	I	端午节	
7月2	譯二	Ⅲ	「桃色的云」（ソ聯、エロシエンコ作）及序	
5	譯二	Ⅲ	「小鸡的悲劇」譯后附記	
8月14	書信	V	胡适 二	
9月20	熱風	Ⅱ	「以震其艰深、	
10月	集拾	Ⅱ	破「唐人說薈」（載10月3日「晨报副刊」）	
	熱風	Ⅱ	所謂「国学」（載10月4日「晨报副刊」）	このころ国学者によって、さかんに提唱された国学について批判攻撃を加え「いわゆる「国学、」を書く。
	呐喊	I	兔和猫	
	呐喊	I	鴨的喜劇	
	呐喊	I	社戏	

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
9	熱風	Ⅱ	兇歌的ゝ反动、	この年も北京大学、北京高等師範学校の講師を兼任。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
11月	故事	Ⅰ	補天	
3	熱風	Ⅱ	ゝ一是之学説、	
4	熱風	Ⅱ	不懂の音譯 一	
6	熱風	Ⅱ	不懂の音譯 二	
9	熱風	Ⅱ	對於批評家の希望	
17	熱風	Ⅱ	反对ゝ含涙、的批評家	
18	熱風	Ⅱ	即小見大	
12月3	呐喊	Ⅱ	自序	
1923年				1923年（民国12，大正12）四十二才
1月	譯十	Ⅲ	観北京大学学生演劇和燕京女校学生演劇的記（ソ联，エロシエンコ 1月6日「晨报副刊」）	8月作人は魯迅との關係を絶ちたい旨の書を寄せる。このため、魯迅は八道灣の家を出て、頓塔胡同六十一号の同郷の知人の家にしばらく移る。（許广平「魯迅回忆录」） 秋から北京大学、北京師範大学、さらに北京女子高等師範学校、世界語（エスペラント）専門学校の講師を兼任。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
11	集拾	Ⅱ	關於「小説世界」	
13	集拾	Ⅱ	看了魏建功君的「不敢盲从」以后的几句声明	
6月	譯一	Ⅲ	「現代日本小説集」（魯迅作人共譯）	
12	書信	Ⅴ	孙伏园 一	
10月7	全8	Ⅱ	「中国小説史略」序言	
24	書信	Ⅴ	孙伏园 二	
11月	墳	Ⅱ	宋民間之所謂小説及其后来	
12月10	書信	Ⅴ	許寿裳 九	
26	墳	Ⅱ	娜拉走后怎样	
1924年				1924年（民国13，大正13）四十三才
1月	集拾	Ⅱ	对于ゝ笑話、的笑話（1月17日「晨报副刊」）	「祝福」から「離婚」（1925年11月作）にいたる作品十一篇を題して「彷徨」とする。
11	書信	Ⅴ	孙伏园 三	
17	墳	Ⅱ	未有天才之前	
23	集拾	Ⅱ	奇怪の日历	
28	熱風	Ⅱ	望勿ゝ糾正、	
2月7	彷徨	Ⅰ	祝福	
16	彷徨	Ⅰ	在酒楼上——拟許欽文——	
18	彷徨	Ⅰ	幸福的家庭	
18	旧全	Ⅱ	幸福的家庭附記	
	補綴			



執年 年月日	筆 書名	種 類	題 名	事 項
3月3日	全8	II	「中国小説史略」后記	
22	彷徨	I	肥皂	
5月26日	書信	V	李秉中 一	5月母と家族をひきとるため友人より八百元を借り、阜城門内西三条胡同二十一号の家を買い移る。(新知書店出版、王士菁「魯迅傳」四二)
6月11日	旧全9	II	「嵇康集」及序	
7月21日	全8	II	中国小説の歴史の變遷	
9月	集拾	II	又是「古已有之」。(載9月28日「晨报副刊」)	7月西北大学、陝西省教育庁の招聘に応じ孫伏園らと西安へ旅行。「中国小説の歴史の變遷」を講演。
15	野草	I	秋夜	8月帰京
24	野草	I	影的告別	この頃唐朝(玄宗と楊貴妃の故事)を題材とした長篇小説を考えていたが果さなかった。
24	野草	I	求乞者	
24	書信	V	李秉中 二	
26	譯三	III	譯「苦悶的象征」(厨川白村著)后三日序	9月のち「野草」として編まれた散文詩「秋夜」他二十三篇を「語糸」につぎつぎ発表。
29	集拾	II	答二百系答一百之誤	
10月	集拾	II	文学救国法(載10月2日「晨报副刊」)	
3	野草	I	我的失恋——拟古的新打油詩——	
28	墳	II	論雷峰塔的倒掉	
30	墳	II	說胡鬚	
31	譯五	III	「西班牙剧坛的将星」譯后附記	
11月	集外	II	說不出(載11月17日「語糸」)	11月「語糸」(週刊、はじめ孫伏園主編)発刊され、青年作家の養成に力をそぐ。彼らを助けて「烏合叢書」「未名叢刊」を編輯出版。「烏合叢書」は専ら創作を未名叢刊は翻訳作品を収めた。
	集外	II	烽話五則(載11月24日「語糸」)	
11	墳	II	論照相之類	
13	集外	II	記「楊樹達、君的襲来	
21	集外	II	关于楊君襲来事件的辯正 一	
22	譯三	III	「苦悶的象征」(厨川白村著)及引言	
24	集外	II	关于楊君襲来事件的辯正 二	
12月	譯十	III	高尚生活(オランダ Multatuli 著)	12月「民众文艺」(週刊、胡也頻主編)の編集を翌年四月まで援助する。
	集外	II	「音楽、?」(12月15日「語糸」)	
	集外	II	我来说「持中」的真相(12月15日「語糸」)	
	譯十	III	「无礼与非礼」(オランダ Multatuli 著)	
	集拾	II	通訊——致郑孝覲——(12月27日「京報副刊」)	

執年	筆月日	書名	種類	題名	事項
1925年	5	譯三	Ⅲ	「觀照享乐的的生活」譯后附記	この年も前年と同様に北京大学、北京師範大学、北京女子高等師範学校及世界語専門学校講師を兼任。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
	14	譯三	Ⅲ	「从灵向肉和从肉向灵」（厨川白村著）譯后附記	
	20	野草	I	复仇	1925年（民国14，大正14）四十四才
	1月	譯十	Ⅲ	Petofi Sandor 的詩（1月12日26日「語糸」署 L. S. 譯）	
	1	野草	I	希望	2月「京報」附録版のアンケート「青年必讀書」に「中国の書物は少しだけ——あるいは全く——読まないで、外国の書物をより多く読むのがよい。」と書き、胡適の「整理国故運動」提唱の状況の下で古書推奨の学者と対立。
	1	集拾	Ⅱ	詩歌之敌	
	8	华盖	Ⅱ	咬文嚼字 一	
	9	集拾	Ⅱ	关于「苦悶的象征」	
	15	华盖	Ⅱ	忽然想到 一	
	16	譯三	Ⅲ	「現代文学之主潮」譯后附記	
	17	华盖	Ⅱ	忽然想到 二	
	18	野草	I	雪	
	20	集外	Ⅱ	咬嚼之余	
	24	野草	I	風箏	
	2月	集外	Ⅱ	咬嚼未始 乏味。（2月10日「京報副刊」）	
	6	墳	Ⅱ	再論雷峰塔的倒掉	
	9	墳	Ⅱ	看鏡有感	
	10	华盖	Ⅱ	咬文嚼字 二	
	10	华盖	Ⅱ	青年必讀書	
	12	华盖	Ⅱ	忽然想到 三	
	16	华盖	Ⅱ	忽然想到 四	
	17	書信	V	李霽野 一	
	24	野草	I	好的故事	
	3月	集拾	Ⅱ	聊答 〃……、（3月5日「京報副刊」）	3月世界語専門学校を辭職（「魯迅日記」）
		集拾	Ⅱ	扱 〃奇哉所謂……、（3月8日「京報副刊」）	
		集拾	Ⅱ	通訊——复孙伏园——（3月8日「京報副刊」）	
		华盖	Ⅱ	論辯的魂灵（3月9日「語糸」）	
		华盖	Ⅱ	牺牲謨—— 〃鬼画符、失敬失敬章第十三——（3月18日「語糸」）	
		譯十	Ⅲ	「我独自行走」（伊东干夫作，3月15日「狂飈」）	

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
		集拾附二	Ⅵ	「苦悶的象征」廣告（3月10日～23日「京報副刊」）	許広平との手紙の往復はじまる。（「兩地書」）
	1	彷徨	I	長明灯	
	2	野草	I	过客	
	11	兩地	V	二	
	12	華蓋	Ⅱ	通訊 一	
	15	書信	V	傅筑夫、梁繩禕一	
	16	集拾	Ⅳ	「陶元庆氏西洋繪画展覽会目录」序	
	18	彷徨	I	示众	
	18	兩地	V	四	
	21	華蓋	Ⅱ	战士和蒼蠅	
	22	集拾附二	Ⅶ	白事	
	23	兩地	V	六	
	29	華蓋	Ⅱ	通訊 二	
	31	兩地	V	八	
4月		集拾	Ⅱ	这是这么一个意思（4月3日「京報副刊」）	4月「莽原」を主編發刊（11月まで「京報附刊」で週刊，翌年1月から独立し，未名社から發行半月刊）重要な許論は魯迅自ら書き，青年の原稿をみ，組版，裝訂に氣を配り，など新しい作家，翻譯者の養成に寢食を忘れて力をそゝいだ。同人には高长虹，尚鉞，向培良，李霽野，台静农，韋素園たち。
		集外	Ⅱ	雜語（4月24日「莽原」）	
	4	華蓋	Ⅱ	夏三虫	
	8	兩地	V	十	
	8	書信	V	刘策奇一	
	12	集拾	Ⅲ	「苏俄文艺論战」（任国楨編譯）前記	
	14	華蓋	Ⅱ	忽然想到五	
	14	兩地	V	十二	
	14	集拾附二	Ⅶ	魯迅啓事	
	18	華蓋	Ⅱ	忽然想到 六	
	22	墳	Ⅱ	春末閑談	
	22	兩地	V	十五	
	23	書信	V	呂藎儒一 高歌一 向培良一	
	23	野草	I	死火	
	23	野草	I	狗的駁詰	
	27	集拾	Ⅱ	来信——致孙伏园——	
	28	兩地	V	十七	
	29	墳	Ⅱ	灯下漫笔	
5月		集拾	Ⅱ	一个“罪犯”的自述（5月5日「民众文艺」）	5月 9日国立北京女子師範大学（北京女子高等師範学校改め）校長楊蔭榆は，評

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
6月	集外	Ⅱ	編完写起(5月15日「莽原」)	議會名義をかりて、許広平、刘和珍ら学生自治会 役員6人 を除名 退校処分 とする。このことから一部教員と学生側の対立は表面化し、ますますはげしくなり、この女師大事件が、「現代評論派」陳西滢、教育総長章士釗らと魯迅との論争のきっかけとなる。(人民文学出版社「魯迅全集」第三卷並非閑話注釈)
	1 彷徨	I	高老夫子	
	3 两地	V	十九	
	4 集拾	Ⅱ	啓事	
	5 华盖	Ⅱ	杂感	
	8 华盖	Ⅱ	北京通信	
	10 华盖	Ⅱ	忽然想到 七	
	11 华盖	Ⅱ	导师	
	11 华盖	Ⅱ	长城	
	13 华盖	Ⅱ	忽然想到 八	
	14 华盖	Ⅱ	忽然想到 九	
	17 書信	V	李霽野 二	
	18 两地	V	二十二	
	21 华盖	Ⅱ	‘碰壁之后、	
	26 集外	Ⅱ	俄文訳文「阿Q正傳」序及著者自叙傳略	
	30 华盖	Ⅱ	并非閑話	
	30 两地	V	二十四	
	譯十	Ⅲ	圣野猪——「眞实如此騙人」中之一篇——(長谷川如是閑著)	
	集拾	Ⅱ	我才知道(6月9日「民众文艺」)	
	集外	Ⅱ	田園思想(6月12日「莽原」)	
	集拾	Ⅲ	「敏捷的譯者」附記(6月12日「莽原」)	
	1 集拾附二	Ⅵ	編者附白	
	2 华盖	Ⅱ	我的‘籍、和‘系、	
	2 两地	V	二十六	
	5 华盖	Ⅱ	咬文嚼字 三	
	11 华盖	Ⅱ	忽然想到 十	
	13 两地	V	二十九	
	16 墳	Ⅱ	杂憶	
	16 野草	I	失掉的好地獄	
	17 野草	I	墓碣文	
	18 华盖	Ⅱ	忽然想到 十一	
	23 华盖	Ⅱ	补白 一	
	28 两地	V	三十二	
	29 野草	I	頽敗線の顫動	
	29 两地	V	三十三	

執年 年月日	筆 書 名	種 類	題 名	事 項
7月1	華蓋	Ⅱ	朴白 二	8月6日章士釗の女師大非合法接収に、魯迅他9名の教員と学生たちは校務維持会を組織。 13日教育部僉事の職を罷免される。(人民文学出版社「魯迅全集」第三卷「答K S君」注釈)  章士釗は軍警をつかって、女師大を北京女子大学に強制改組、女師大の学生は宗帽胡同に校舎を借りて開校。 陳西滢らは「教育界維持公理会」、「女子大学後援会」をつくり、「現代評論」誌によって魯迅を攻撃。 31日魯迅は平政院に章士釗を提訴(魯迅の勝訴)(人民文学出版社「魯迅全集」第三卷「答K S君」注釈) この年は、北京大学、北京女子師範大学中国大学の講師および黎明中学の教員(十二月辞職)を兼任。(許寿裳「魯迅先生年譜」 年末「未名社」を結成。 当時翻訳書の販路がふるわなかったため「未名叢刊」は北新書局から韋素園にひきつがれ、「未名社」を結成した。主にロシアの古典文学作品、ソ聯の革命文学理論、現代ソ聯作家の作品の紹介翻訳。同人に李霽野、韋素園、台静农、曹靖华たち。
3	集拾附二	Ⅵ	正誤	
8	華蓋	Ⅱ	朴白 三	
8	野草	Ⅰ	立論	
9	两地	Ⅴ	三十四	
12	野草	Ⅰ	死后	
19	墳	Ⅱ	論「他媽的」	
22	墳	Ⅱ	論睜了眼看	
29	两地	Ⅴ	三十五	
8月5	集外	Ⅱ	流言和謠話	
6	集拾	Ⅱ	女校長的男女的夢	
20	華蓋	Ⅱ	答K S君	
23	書信	Ⅴ	台静农 一	
9月1	集外	Ⅱ	通信——复霁江——	
10	旧全補続	Ⅱ	「中国小説史略」再版附識	
15	華蓋	Ⅱ	「碰壁」之余	
19	華蓋	Ⅱ	并非閑話 二	
29	書信	Ⅴ	許欽文 一	
30	書信	Ⅴ	許欽文 二	
10月17	彷徨	Ⅰ	孤独者	
21	彷徨	Ⅰ	伤逝——涓生的手記——	
30	墳	Ⅱ	从胡鬚説到牙齿	
11月3	热风	Ⅱ	題記	この年は、北京大学、北京女子師範大学中国大学の講師および黎明中学の教員(十二月辞職)を兼任。(許寿裳「魯迅先生年譜」 年末「未名社」を結成。 当時翻訳書の販路がふるわなかったため「未名叢刊」は北新書局から韋素園にひきつがれ、「未名社」を結成した。主にロシアの古典文学作品、ソ聯の革命文学理論、現代ソ聯作家の作品の紹介翻訳。同人に李霽野、韋素園、台静农、曹靖华たち。
3	彷徨	Ⅰ	弟兄	
6	彷徨	Ⅰ	离婚	
18	華蓋	Ⅱ	十四年的「讀經」	
18	華蓋	Ⅱ	評心雕龙	
22	華蓋	Ⅱ	并非閑話 三	
22	墳	Ⅱ	堅壁清野主义	
23	墳	Ⅱ	寡妇主义	
12月3	譯三	Ⅲ	「出了象牙之塔」(厨川白村著)及后記	
8	華蓋	Ⅱ	这个与那个 一 讀經与讀史	
10	華蓋	Ⅱ	这个与那个 二 捧与挖	
13	華蓋	Ⅱ	我觀北大	
14	野草	Ⅰ	这样的战士	
18	華蓋	Ⅱ	「公理」的把戏	
20	華蓋	Ⅱ	这个与那个 三 流产与斷种	

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
				四 最先与最后	
	22	華蓋	II	碎話	
	26	野草	I	聰明人和傻子と奴才	
	26	野草	I	臘叶	
	28	華蓋	II	这回是「多数」の把戏	
	29	墳	II	論「費厄瀝穎」應該緩行	
	31	華蓋	II	題記	
1926年					1926年（民国15, 大正15, 昭和1）四十五才
	1日	譯十	III	岁首（長谷川如是閑著、署杜斐譯）	1月北京女子師範大学復校し、新校長に易培基就任、魯迅は辭職。
	3	華綾	II	雑論閑事・做學問・灰色等	17日教育部僉事に復職。（新知書店出版王士菁「魯迅傳」五三）
	14	華綾	II	有趣的消息	
	24	華綾	II	學界の三魂	
	25	華綾	II	古書と白話	
	25	華綾	II	一点比喩	
	2月1	華綾	II	不是信	
	3	華綾	II	我還不能「帶住」	
	5	華綾	II	送灶日漫筆	
	15	華蓋	II	后記	
	17	華綾	II	談皇帝	
	21	朝夕	I	狗・猫・鼠	「阿長と山海經」他十篇、のちに「朝花夕拾」と題して単行された自伝風の回想的散文を書きつぐ。
	23	書信	V	章廷謙一	
	27	華綾	II	天花の薔薇	
	3月10	集拾	II	中山先生逝世后一週年	
	10	朝夕	I	阿長と山海經	
	16	譯十	III	「罗曼罗兰の眞勇主义」（中沢臨川、生田長江著）及譯者記	
	18	華綾	II	天花の薔薇之二	3月18日「花なき薔薇の二」を書く。（三一八事件）
	25	華綾	II	「死地、	
	26	華綾	II	可慘と可笑	
	4月1	華綾	II	記念劉和珍君	4月1日三一八事件の犠牲となった魯迅の女子學生劉和珍をいたみ「劉和珍君を記念して」を書く。
	2	華綾	II	空談	
	6	華綾	II	如此「討赤、	
	8	野草	I	淡淡的血痕中——記念几个死者和生者和未生者——	大学教授等五十余人に逮捕令が出され魯迅は莽原社、山本医院、独国医院、法国医院へ転転と避難。（人民文学出版社「魯迅全集」第二卷「朝花夕拾」「小引注釈」）
	9	書信	V	章廷謙	5月家にもどる。（「魯迅日記」）
	10	野草	I	一觉	
	5月6	華綾	II	无花的薔薇之三	
	10	朝夕	I	二十四孝图	中国大学講師を辞任。（「魯迅日記」）

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
	12	集外	Ⅱ	「痴华鬘」題記	「中国小説史略」の資料の一部を「小説旧聞鈔」として輯録。
	23	华綾	Ⅱ	新的薔薇——然而还是无花的——	
	24	华綾	Ⅱ	再来一次	
	25	集拾	Ⅱ	「何典」題記	
	25	华綾	Ⅱ	为半农題記「何典」后作	
	25	朝夕	Ⅰ	五猖会	
6月		譯十	Ⅲ	「小兒の睡相」(有島武郎著)	
	2	集外	Ⅲ	「穷人」(ドストエフスキー作) 小引	
	9	集外	Ⅱ	通信——复未名——	
	9	書信	Ⅴ	章廷謙 三	
	17	書信	Ⅴ	李秉中 三	
	23	朝夕	Ⅰ	无常	
	25	华綾	Ⅱ	馬上日記	
	26	华綾	Ⅱ	馬上日記	
	28	华綾	Ⅱ	馬上日記	
	29	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
7月	1	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	2	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	3	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	4	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	5	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	6	华綾	Ⅱ	馬上支日記	
	7	华綾	Ⅱ	馬上日記之二	
	8	华綾	Ⅱ	馬上日記之二	
	14	書信	Ⅴ	章廷謙 四	8月 軍閥官僚、現代評論派文人たちの迫害を避けるため、当分休息し準備をととのえるため。(「两地書」一〇二) 十数年住みなれた北京をはなれる。津浦線で上海まで許広平と同行。魯迅は厦門へ、許広平は广州へむかう。
	21	集拾	Ⅲ	「十二个」(ロシア、プロ オク著、胡敦譯) 后記	
	21	华綾	Ⅱ	記 發薪、	
8月		譯十	Ⅲ	巴什庚之死(ロシア、アル ティバーエフ著)	
		集拾	Ⅵ	「未名丛刊」与「烏合丛书」	
		附二		广告	
		彷徨	Ⅰ	題辭	
	1	旧全10	Ⅱ	「小説旧聞鈔」及序言(編 録校勘)	
	8	書信	Ⅴ	韦素园 一	
	15	書信	Ⅴ	許広平 一	
	30	华綾	Ⅱ	上海通信	

執 年	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
9月	4	两地	V	三十六	9月林語堂の招きで、厦門大学文科国文学系の教授、国学院研究教授を兼任。講座は中国文学史と中国小説史を担当。（「两地书」四一） 中国文学史の講義（未完稿）は「汉文学史綱要」となる。魯迅の生前には出版されなかった。 図書館の三階の空き部屋に住み、自由な日常生活をおくる。（「两地书」厦門通信）
	11	两地	V	四十	
	12	两地	V	四十一	
	18	朝夕	I	从百草园到三味书屋	
	20	两地	V	四十二	
	22	两地	V	四十四	
	23	华続続	II	厦門通信	
	25	两地	V	四十六	
	28	两地	V	四十八	
10月		故事	I	鏢劍	10月「莽原」同人間に不和を生じ、解散。 「莽原」停刊。紛糾の原因は「莽原」が向培良の戯曲をのせなかったため培良と韋素園が北京でおこした紛糾へ上海から高長虹が介入、長虹は「狂飈」によってさらに魯迅を攻撃。（「两地书」六〇） 同人であった彼ら文学青年の卑劣さに幻滅を感じ長虹をからかって「莽月」を書く。（「两地书」一一二） 厦門滞在二ケ年の予定を一ケ年に変更。（「两地书」五三） 厦門大学校長は尊孔派、国学院は顧頡剛一派で固められている。学校経営の方針や教員の待遇の悪さもまた落着かせなかった。（「两地书」厦門通信）
	4	两地	V	五十	
	4	書信	V	韦素園 二	
	4	書信	V	許寿裳 十	
	7	朝夕	I	父亲的病	
	8	朝夕	I	瑣記	
	10	两地	V	五十三	
	12	朝夕	I	藤野先生	
	12	两地	V	五十四	
	14	华続	II	記談話	
	14	华続	II	小引	
	14	华続	II	（校訖記）	
	16	两地	V	五十六	
	20	两地	V	五十八	
	21	两地	V	六十	
	28	两地	V	六十二	
	29	两地	V	六十四	
	29	書信	V	陶元庆 一 李霽野 三	
	30	墳	II	題記	
11月	1	两地	V	六十六	
	3	两地	V	六十八	
	6	两地	V	六十九	
	7	华続続	II	厦門通信 二	
	9	两地	V	七十一	
	9	書信	V	韦素園 三	
	11	墳	II	写在 墳、后面	
	14	集拾	III	「爭自由的波浪」（ロシア ゴリキー作、董秋芳譯）小引	
	15	两地	V	七十三	
	18	朝夕	I	范愛农	
	18	两地	V	七十五	



執年	筆月日	書名	種類	題名	事項
	20	两地	V	七十九	
	22	書信	V	陶元庆 二	
	23	書信	V	李霁野 四	
	25	两地	V	八十一	
	28	两地	V	八十三	
12月		故事	I	奔月	
		华綾綾	II	所謂「思想界先驅者」魯迅啓事（12月10日「莽原」）	
	2	两地	V	八十五	
	3	华綾綾	II	阿Q正傳の成因	
	3	两地	V	八十六	
	5	書信	V	韦素园 四	
	8	書信	V	韦素园 五	
	6	两地	V	八十八	
	11	两地	V	八十九	
	12	两地	V	九十三	
	14	两地	V	九十五	
	19	書信	V	沈兼士 一	
	20	华綾綾	II	关于三藏取經記等	
	20	两地	V	九十六	
	22	集拾	II	「走到出版界」的「战略」	
	23	两地	V	九十八，九十九	
	24	集拾	II	新的世故	
	24	两地	V	一〇一	
	29	两地	V	一〇二	
	31	华綾綾	II	厦門通信 三	
1927年					1927年（民国16，昭和2）四十六才
1月	2	两地	V	一〇四	1月厦門滞在一年の予定を四ヶ月で切りあげ（「两地書」七五）18日广州着。
	5	两地	V	一〇五	中山大学文学系主任教授，許广平が助手となる。講座は文学論，中国文学史。翌月教務主任を兼任。中山大学校内の鐘楼に住む。（新知書店出版王士菁「魯迅傳」六〇）
	6	两地	V	一〇九	
	6	譯十	III	运用口語的填詞（鈴木虎雄著）	
	8	华綾綾	II	（小引）	
	11	两地	V	一一二	
	12	書信	V	翟永坤 一	
	14	集拾	II	「絳洞花主」小引	
	16	华綾綾	II	海上通信	
	17	两地	V	一一三	
2月	16	三閑	II	无声的中国——在香港青年会讲——	中山大学に來たとき，魯迅は戦士，革命家として盛大な歓迎をうける。しかし当時の广州の政治情況はきわめて複雑であった。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」六〇）

執年	筆日	書名	種類	題名	事	項
	19	集拾	II	老調子已經唱完——在香港青年會講——		
	3月1	集拾	II	中山大学开学致語——在广州中山大学講——	3月29日中山大学の大鐘楼より広州東堤白雲楼に移転。	
	24	而已	II	黄花节的杂感		
	4月6	而已	II	略論中国人的臉	4月広州でも15日より反革命の血腥い嵐さぶ。中山大学の学生も数多く逮捕された。魯迅は中山大学各系主任緊急会議の席上、逮捕された学生たちの釈放を図ったが、効果がなかった。	
	8	而已	II	革命時代の文学——在黄埔軍官学校講——		
	11	而已	II	写在‘劳动問題、之前		
	26	野草	I	題辭		
	5月1	朝夕	I	小引	29日中山大学を辞職。(人民文学出版社「魯迅全集」所収著譯年表)	
	30	譯四	III	「小約翰」(オランダ、ヴァン・エーデン作)及引言		
	7月	三閑	II	辭顧頡剛教授令‘候审、		
	7	集拾	II	「游仙窟」序言		
	11	而已	II	略談香港		
	11	朝夕	I	后記		
	16	而已	II	讀書杂談——在广州知用中学講——		
	27	書信	V	江紹原 一		
	30	集拾	II	关于小説目录两件		
	8月8	書信	V	章廷謙 五		
	9月	三閑	II	匪筆三篇(9月10日「語糸」)	9月‘しかし今私が沈黙している理由は、厦門をはなれた時から、すでに私の思想はいくぶん変わってきたからです。……私の一種の愚かな夢はこわされてきました。私は今まで一種の樂觀をもって、青年を圧迫、殺戮するものは大てい老人だと思っていました。……だから今ではそうでないことを知りました。青年を殺戮するものは、大てい青年のようです、と有恒氏に書きおくる。(「而已集」「答有恒先生」)	
		旧全10	II	「唐宋傳奇集」及序例(編録校勘)		
		集拾	II	书苑折枝一・二(9月1日16日「北新」)		
		三閑	II	怎么写——夜記之一——		
		而已	II	魏晉風度及文章与葯及酒之关系——在广州夏期学术演講会講——		
	3	而已	II	辞‘大義、		
	3	而已	II	通信		
	4	而已	II	答有恒先生		
	4	而已	II	反‘漫談、		
	4	而已	II	憂‘天乳、		
	9	而已	II	革‘首領、		
	11	而已	II	談‘激烈、		
	14	而已	II	可惡罪		
	14	而已	II	新时代的放債法		

執年	筆月日	書名	種類	題名	事項
	15	而已	II	扣糸杂感	
	19	書信	V	翟永坤 二	
	22	三閑	II	某笔两篇	
	24	而已	II	小杂感	
	25	書信	V	李霽野 六・台静农 二	
	29	而已	II	再談香港	月末，許广平とともに广州をはなれる。
10月		集拾	II	书苑折枝 三（10月10日「莽原」10月16日「北新」）	10月8日上海に着き，閘北景雲里二十三号に落着き，許广平と結婚。（雪葦「魯迅先生年譜」）
		而已	II	「公理」之所在（10月22日「語糸」）	多くの学校より講演を依頼される。魯迅を教授に招聘しようとした学校もあったが辞退し，これより著述と翻訳に専心する。（新知書店 王士菁「魯迅傳」六四）
		而已	II	「意表之外」。（10月22日「語糸」）	
		而已	II	革命文学	
4		書信	V	台静农・李霽野 三	
25		集拾	II	关于知識階級——在上海劳动大学讲——	
11月		三閑	II	述香港恭祝聖誕（11月26日「語糸」）	
	18	書信	V	翟永坤 三	
	26	譯十	III	信州杂記（ソ联，ビリニヤク著）	
12月		譯五	III	「近代美术史潮論」（板垣鷹穂著）	12月大学院院長蔡元培の招きに応じ，その特約著作員となる。（許寿裳「魯迅先生年譜」）
		三閑	II	在鐘楼上——夜記之二——（12月17日「語糸」）	
		集拾	II	补救世道文件四种（12月31日「語糸」）	
		集拾	II	「丙和甲」按語（12月31日「語糸」）	
4		三閑	II	吊与賀	
6		旧全补	III	关于「近代美术史潮論」	
6		書信	V	李小峰 一	「文学研究会、でかねて文通のあった茅盾の住居とすじ向いになり，三弟建人と共に訪ねて，初めて会談する。（中国青年出版社出版 王士菁「魯迅」36）
7		而已	II	「尘影」題辭	
13		而已	II	当陶元庆君的繪画展覽時	
19		書信	V	邵文鎔 一	
21		而已	II	蘆梭和胃口	
21		集外	II	文艺与政治的歧途——在上海暨南大学讲——	
23		而已	II	文学和出汗	
24		而已	II	文艺和革命	

執年 筆月日	書名	種類	題名	事項
24 1928年 1月	而已 譯五 集拾 而已 集拾 集拾	II III II II II II	談所謀 *大内档案。 「卢勃克和伊里納的后来」 譯后附記（1月10日「小説 月報」） 「某報剪注」按語（1月21 日「語系」） 拟予言——一九二九年出現 的瑣事——（1月28日「語 系」） 「禁止标点符号」按語（1 月28日「語系」） 「行路难」按語（1月28日 「語系」）	1928年（民国17，昭和3）四十七才
2月23 24 26 3月	三閑 書信 書信 集拾	II V V II	*醉眼、中的朦朧 台静农 四 李霽野 七 通信——季廉来信按語—— （3月19日「語系」）	
6 14 19 21	書信 三閑 集拾 集拾	V II II VI	章廷謙 六・七 看司徒乔君的画 「示众」編者注 本刊小信	2月「語系」の主編をこれより半年間担当。 （1927年11月北京で張作霖により封鎖さ れる。1928年上海で復刊。1930年2月に 至り停刊。） 「*醉眼、中の朦朧」を書き，創造社 （馮乃超，成仿吾，李初梨）の魯迅に対 する批判に反駁，*革命文学、が論争の 中心となる。（人民文学出版社「魯迅全 集」第四卷「*醉眼、中の朦朧」注釈）
附二 27 31	附二 三閑 譯三	II II III	在上海的魯迅啓事 「思想・山水・人物」（鶴 見祐輔著，選譯）及題記	
4月	集拾	II	「这回是第三次」按語（4 月30日「語系」）	
4	三閑	II	文艺与革命	
9	書信	V	李秉中 四	
10	三閑	II	扁	
10	三閑	II	路	
10	三閑	II	头	
10	三閑	II	通信	
10	三閑	II	太平歌訣	
10	三閑	II	創共大観	
11	集拾	II	关于「近代美术史潮論」插图	
12	集拾	II	通信——复張孟聞——	
20	三閑	II	我的态度气量和年紀	

執年 月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
6月		集拾	Ⅵ	「奔流」凡例五則（6月20	6月「奔流」（月刊）を創刊主編。主として文学創作，翻訳をのせる。同人には郁达夫，白薇，林語堂たち。
		附二		日「奔流」）	
	2	譯十	Ⅲ	苏維埃联邦从 Maxim Gorky 期待着什么？（ロシア プハーリン著）	
	5	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 一	
7月		譯十	Ⅲ	「生活的演劇化」（ソ联 Nikolai Evreinov 著 署 葛何德譯）	9月景雲里18号に移転。もとの二十三号の家を柔石に譲る。（中国青年出版社，王士菁「鲁迅」36）
	4	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 二	
	17	書信	Ⅴ	錢君匄 一	
	20	集拾	Ⅱ	信件摘要——复曉真・康嗣群——	
	25	書信	Ⅴ	康嗣群 一	
8月	10	三閑	Ⅱ	革命咖啡店	
	10	三閑	Ⅱ	文壇的掌故	
	10	三閑	Ⅱ	文学的階級性	
	11	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 三	
	19	書信	Ⅴ	章廷謙 八	
	20	集拾	Ⅱ	「剪报一斑」拾遺	
	28	集拾	Ⅱ	「我也来談談复旦大学」文后附白	
9月	1	集拾	Ⅱ	通信——复章达生——	
	15	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 四	
	20	譯十	Ⅲ	「食人人种的話」(Charles-Louis Philippe作) 譯后附記	
	2	譯十	Ⅲ	『关于綏豐諾夫及其代表作「飢餓」』（黒田震男著）	
10月	20	而已	Ⅱ	大衍發微	
	26	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 五	
	27	旧全	Ⅲ	「农夫」（ロシア，ヤコブレーエフ作）譯者附記	
		補綾			
	30	而已	Ⅱ	題辭	
11月		集拾	Ⅵ	編者附白（10月30日「奔流」）	
		附二			
		譯十	Ⅲ	「关于脚本的考察」（ソ联 Nikolai Evreinov 著 署 葛何德譯）	
		譯十	Ⅲ	「坦波林之歌」（露谷虹児作）	

執 年 月 日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
		譯十	Ⅲ	「跳蚤」(フランス 亜波里耐尔作「奔流」署封余譯)	
	4	書信	V	赵景深 一	
	7	書信	V	章廷謙 九	
	8	集拾	Ⅱ	「东京通信」按語	
	15	譯八	Ⅲ	「豎琴」(ロシア, リーデイン作) 譯后記	
	18	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 六	
12月		譯十	Ⅲ	「訪革命后的托尔斯泰故乡記」(藏原惟人著, 署許霞(許广平) 譯)	
		譯十	Ⅲ	「LEOV TOLSTOI」——「最近俄国文学史略」的一章——(Lvov-Rogachevski 著, 12月30日「奔流」)	
		譯十	Ⅲ	「雄鸡和杂饌」抄(フランス J. Cocteau 著)	
		譯十	Ⅲ	「一九二八年世界文艺界概観」(千葉龟雄著)	
		譯十	Ⅲ	「LEOV TOLSTOI」(Maiski 訳, 12月30日「奔流」)	
		集拾附	Ⅵ	敬賀新禧(12月30日「奔流」)	
23		集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 七	
30		書信	V	陈溶 一	
1929年		集拾附	Ⅱ	开給許世瑛の書单(1928~1930年の間と推定。許寿裳「亡友魯迅印象記」より)	1929年(民国18, 昭和4) 四十八才
1月		譯十	Ⅲ	路谷虹兒的詩(「路谷虹兒画选」より)	1月柔石、王方仁、崔真吾ら数人の青年を援けて「朝花社」をつくる。きわめて限られた資金で「朝花周刊」「朝花旬刊」「艺苑朝华」を出して、国外の画や木刻版画を紹介。この外「近代世界短篇小説集」を出す。特に木刻の紹介は、中国の新興芸術に光をさし入れ、現代中国の新しい木刻芸術の基礎をうちたてた。(中国青年出版社 王士菁「魯迅」36)
	2	譯七	Ⅲ	「十月」(ロシア, ヤコブレイエフ著) 譯后附記	この後、最初の新興芸術団体「一八艺社」が杭州西湖艺术专科学校内に生まれる。
	6	書信	V	章廷謙 十	
	18	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記八	
	20	譯六	Ⅲ	「托尔斯泰之死与少年欧罗巴」(ルナチャルスキー著) 譯后附記	
	20	集拾	Ⅳ	「近代木刻选集」一 小引及附記	

執年 年月日	筆 名	種 額	題 名	事 項
24	集拾	Ⅳ	「崑崙虹兒画選」小引	4月この頃より比較的系統的にマルクス主義文芸理論の翻訳をはじめめる。
28	集拾	Ⅱ	謹啓——致「北新」讀者——	
2月14	譯五	Ⅲ	「現代新興文学的諸問題」 (片山伸著) 及小引	
17	三閑	Ⅱ	「革命軍馬前卒、和「落伍者、	
25	集拾	Ⅲ	致「近代美術史潮論」的讀者諸君	
3月3	集拾	Ⅲ	哈謨生的几句话	
10	集拾	Ⅳ	「近代木刻選集」二 小引及附記	
22	書信	Ⅴ	韦素園 六・李霽野 八	
23	書信	Ⅴ	許壽裳 十一	
25	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 九	
4月	譯十	Ⅲ	「面包店时代」(スペイン パローハ著)	
	譯十	Ⅲ	「捕獅」(フランス, フィ リップ作)	
	譯十	Ⅲ	「貴家婦女」(ソ聯, ゴシ チェンコ作)	
	譯十	Ⅲ	「波兰姑娘」(ソ聯, ゴシ チェンコ作)	
20	譯五	Ⅲ	「壁下譯丛」(ソ聯, 日本 の作家の論文二十五編を収 める。魯迅譯) 及小引	
	集拾附	Ⅵ	「艺苑朝華」廣告	
20	集外	Ⅱ	关于「关于紅笑」	
20	集拾	Ⅳ	「比亚茲萊画選」小引	
22	譯六	Ⅲ	「艺术論」(ソ聯, ルナチ ヤルスキー) 及小序	
25	譯十	Ⅲ	「新时代的豫感」(片山伸著)	
26	三閑	Ⅲ	「近代世界短篇小説集」小引	
5月10	集外附	Ⅲ	「奔流」編校后記 十	5月13日北京に帰省。二十日ばかり滞在。 燕京大学, 北京大学などで講演。 西山の病院に病む韦素園を見舞う。 (新知書店出版王士菁「魯迅傳」六五)
15	兩地	Ⅴ	一一六	
17	兩地	Ⅴ	一一七	
19	兩地	Ⅴ	一一八	
22	兩地	Ⅴ	一二一	
22	三閑	Ⅱ	現今的新文学的概観——在 燕京大学国文学会讲——	
23	兩地	Ⅴ	一二二	

執年 月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	25	两地	V	一二五	
	26	两地	V	一二六	
	27	两地	V	一二八	
	29	两地	V	一二九	
	30	两地	V	一三二	
6 月		譯十	III	爱尔兰文学之回顧（野口未次郎著）	6 月 5 日上海に帰る。（「魯迅日記」）
		譯十	III	表現主義諸相（山岸光宣著）	
	1	两地	V	一三五	
	19	譯六	III	『論文集「二十年間」第三版序』（ソ聯、プレハノフ著）譯后附記	
	21	書信	V	陈君涵 一	
	24	書信	V	李霽野 九	
	25	集外	II	通訊——复张逢汉——	
	25	書信	V	白莽 一	
7 月 8		書信	V	李霽野 十	
	28	三閑	II	＊皇汉医学、	
	28	三閑	II	「吾国征俄战史之一頁」	
	28	三閑	II	叶永蓁作「小小十年」小引	
	31	書信	V	李霽野 十一	
8 月 11		集外附	III	「奔流」編校后記 十一	
	16	譯六	III	「文艺与批評」（ルナチヤルスキーの評論六編を収める）及附記	
	17	書信	V	章廷謙 十一	
	20	三閑	II	柔石作「二月」小引	
	21	集拾	II	关于「子見南子」	
	30	譯十	III	人性的天才——迦尔洵（ロシア Lvov-Rogachevski 著	
9 月		譯八	III	「放浪者伊利沙麗台」和「跋司珂族的人們」（スペイン Pio Baroja y Nessi 著）譯后記	9 月「新月派」の梁实秋は機関誌「新月」第二卷第六・七号で「文学に階級性があるか」を発表し、マルクス主義文学理論に對抗。
		譯十	III	「农夫」（ロシア、ヤコブレイエフ作）	27 日男児うまれる。海嬰と名づける。
	15	三閑	III	「小彼得」（ハンガリー、ミューレン作，許广平譯）訳本序	
11 月 18		譯十	III	「VI. G. 理定自傳」（尾	11 月馮雪峯、郁达夫らと共編で「萌芽」



執年 年月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	20	旧全 補続	Ⅲ	崎敬止編) 編輯后記——「譯文」——	(月刊) 創刊。(のち左連の機関誌とな り，五期で発禁)。
	20	集外附 譯十	Ⅲ	「奔流」編校后記 十二	
12月		譯十	Ⅲ	契訶夫与新文艺 (ロシア, Lvov-Rogachevski 著)	12月「奔流」停刊。
		譯十	Ⅲ	青湖記游 (ロシア 确木努 易著)	
22		三閑	Ⅱ	我和「語糸」的始終	
1930年		譯十	Ⅲ	「惡魔」 (ソ联, ゴリキー 著)	1930年 (民国19, 昭和5) 四十九才
1月		三閑	Ⅱ	流氓的变迁 (1月「萌芽」)	
		三閑	Ⅱ	新月社批評家的任务 (1月 「萌芽」)	
	16	譯十	Ⅲ	「現代电影与有产階級」 (岩崎昶著) 及譯者附記	
2月		三閑	Ⅱ	書籍和財色 (2月1日 「萌芽」)	2月「自由大同盟」成立し，発起人の一人 として参加。
		集拾附 譯十	Ⅵ	「文艺研究」例言	浙江省 (国民) 党部から国民党南京政 府に「墮落文人鲁迅、逮捕の申請発せら れる。(中国青年出版社 王士菁「鲁迅」 37)
	8	譯七	Ⅲ	「毁灭」 (ソ联 ファジェ ーエフ作) 第二部一章至三 章 譯者附記	
	19	集拾	Ⅱ	通訊—柳无忌来信按語—	
	22	二心	Ⅱ	張資平氏的「小説学、	
	25	集拾	Ⅳ	「新俄画选」小引	
3月		集拾	Ⅱ	文艺的大众化 (3月1日 「大众文艺」)	3月「硬譯、と「文学の階級性、」「家 をなくした、「資本家の貧弱な走狗、」 を書き，新月派梁实秋らの買辦資産階級 の文艺理論を批判。(人民文学出版社「魯 迅全集」第四卷「二心集」所収「硬譯与 的階級性」注釈)
		二心	Ⅱ	「硬譯、与「文学的階級 性、	
		二心	Ⅱ	習慣与改革	
		二心	Ⅱ	非革命的急進革命論者	
	2	二心	Ⅱ	对于左翼作家聯盟の意見 ——在左翼作家聯盟成立大 会許——	「左翼作家聯盟、成立し，発起人の一 人として参加，「左翼作家聯盟に對する 意見」を講演。機関誌「萌芽」を馮雪峯 と共編。(五期を出して後「新地」と改 題一期で停刊) 一時家を離れて避難。
4月		二心 譯十	Ⅱ Ⅲ	我們要批評家 艺术与哲学、倫理 (本庄可 宗著)	

執年 年月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	12	譯六	III	「文艺政策」(ソ聯の文芸に関する会議録, および決議を収める) 及后記	4 月家に帰る(許寿裳「魯迅先生年譜」)
	12	書信	V	方善境 一 李秉中 五	
	17	二心	II	好政府主义	
	19	二心	II	「喪家的、資本家的乏走狗、	
5 月	3	書信	V	李秉中 六	5 月北四川路に移転。(「魯迅日記」)
	5	二心	III	「進化和退化」(周建人輯譯) 小引	
	8	二心	III	「艺术論」(ソ聯, プレハノフ著) 及譯本序	
	16	旧全20 附	II	自傳	
6 月		集拾	III	「浮士德与城」(ソ聯, ルナチヤルスキー著, 柔石譯) 后記及作者小傳	
	9	書信	V	李霽野 十二	
8 月	2	書信	V	方善境 二	
	30	譯七	III	「十月」(ロシア ヤコブレイエフ作) 及后記	
9 月		譯十	III	无产階級革命文学論(ハンガリー Andor Gábor 著)	9 月17日当時フランス祖界の荷蘭(オランダ) レストランで, 五十才(数え年) 祝賀記念会が官憲の目を避けて開かれた。
	3	書信	V	李秉中 七	このときスメドレーも参加。魯迅は許廣平, 海嬰とともに出席, 護衛をにおいて講演を行う。(中国青年出版社 王士菁「魯迅」39)
	16	集拾	III	「静静的頓河」(ソ聯 ショーロホフ作 賀非譯) 后記	
10月	13	書信	V	王喬南 一	10月4・5 両日, 内山完造とともに版画展を開く。場所は北四川路の日本人購買組合第一店の二階を借りる。魯迅自身所蔵の版画も多数ならべられた。(新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七一)
11月	14	書信	V	王喬南 二	
	19	書信	V	崔眞吾 一	
	25	全8	II	「中国小説史略」題記	
12月	6	書信	V	孫用 一	
	30	集拾	III	「鉄甲列車 Nr. 14~69」(ソ聯 イヴァノフ作 韓侍桁譯) 譯本后記	11月「中国小説史略」は1925年9月北京北新書店より出版されたが, 1930年作者はその内容に修改訂正を加えた。その後のものはすべて1930年修訂後の版本によっている。
1931年		旧全14	VI	「葯用植物」(刈米達夫著)	1931年(民国20, 昭和6) 五十才 1 月柔石、胡也頻、李偉森、殷夫、馮鏗 た

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
1月17	譯七	Ⅲ	「毁灭」(ソ联 ファジェーエフ作) 及后記	ち五人の作家が上海で捕えられ2月7日夜間に、その他十数人の政治犯とともに国民党政府の竜章警備司令部で銃殺される。20日魯迅は広平、海嬰とともに避難。情況は陰悪となり、北京の母も案じて寝こむ。 宿屋の庭にたゞずみ、悲憤のうちに沈痛な詩をつくる(「南腔北朝集」のなかの「忘却のための記念」に収められている。) (中国青年出版社 王士菁「魯迅」39) 2月28日家に帰る。(「魯迅日記」)
19	二心	Ⅱ	关于「唐三藏取经诗话」的版本	
21	書信	V	許寿裳 十二	
23	書信	V	李小峰 二	
2月2	書信	V	韦素园 七	
4	書信	V	李秉中 八	
12	集外	I	送O. E. 君蕤兰归国	
18	書信	V	李秉中 九	
24	書信	V	曹靖华 一	
3月	集外	I	无題	
	集外	I	贈日本歌人	4月「左聯」は柔石たちを記念して、極秘のうちに「前哨」第一期「戦死者紀念特集号」を出版。魯迅は「中国無産階級革命文学と前驅の血」を書く。「前哨」は第二期より「文学導報」と改名。 スメドレーに托してアメリカの「新群衆」誌に「暗黒な中国文芸界の現状」を発表。 ケーテ・コルヴィッツの版画を購入。
	集外	I	湘灵歌	
6	書信	V	李秉中 十	
4月	二心	Ⅱ	柔石小傳(4月25日「前哨」)	
	二心	Ⅱ	中国无産階級革命文学和前驅の血(4月25日「前哨」)	
	二心	Ⅱ	黑暗中国的文艺界的現状	
1	集拾	Ⅲ	「勇敢的約翰」(ハンガリー、ペトフィー著、孙用譯) 校后記	
5月22	二心	Ⅱ	一八艺社习作展覽会小引	
6月	集外	I	无題	
13	書信	V	曹靖华 二	
23	書信	V	李秉中 十二	8月17日~22日内山嘉吉(内山完造の弟)を招いて木刻講習会を開く。その通訳をもつとめる。(新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七一)
26	書信	V	李小峰 三	
8月	譯十	Ⅲ	「世界无産階級革命作家对于中国白色恐怖及帝国主义干涉的抗議」(ドイツ、路特威錫 棱著)	
	譯十	Ⅲ	「中国起了火」(オーストリア、ハンス、マイーアル作)	
12	二心	Ⅲ	上海文艺之一瞥——在社会科学研究会讲——	
12	譯八	Ⅲ	「肥料」譯后附記	
16	書信	V	蔡永言 一	
9月	集拾	Ⅳ	凱綏・珂勒惠支木刻「牺牲」説明	
21	二心	Ⅱ	答文艺新聞社問——日本占領東三省的意义——	
				9月「文芸新聞社の問に答えて」の一文で日本の東三省占領について書く。

執年 年月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
10月	27	二心	Ⅲ	「夏娃日記」(米, マーク・トウェイン作, 李兰譯)小引	10月「民族主義文学、の任務と運命」を書き黄震遐、王平陵らの「民族主義文学」を批判。(人民文学出版社「魯迅全集」第四卷二心集所収注釈) この頃日本プロレタリア文化連盟の名譽中央協議員にゴーリキー等とともにえらばれる。(手塚英孝著「小林多喜二」)
		二心	Ⅱ	唐朝的釘梢(10月20「北斗」)	
		二心	Ⅱ	民族主義文学、の任務和運命(10月23「文学導報」)	
		集拾附	Ⅵ	魯迅啓事(10月26日「文艺新聞」)	
		集拾	Ⅳ	墨西哥理惠拉壁画之一「貧人之夜」(10月「北斗」)	
11月		二心	Ⅱ	以脚報国(10月20日「北斗」)	12月馮雪峯と共編で「十字街頭」(労働者讀物, 旬刊)を創刊。(三期までつづく)
		譯十	Ⅲ	「静静的頓河」作者小傳(賀非譯「静静的頓河」より)	
	5	書信	Ⅴ	孫用 二	
	10	集拾	Ⅲ	「鉄流」(ソ聯 セラフィモヴィチ作, 曹靖華譯)編校后記	
	22	集拾	Ⅳ	「梅斐尔德木刻士敏土之图」序言	
12月	29	二心	Ⅱ	沈淦的泛起	
		譯十	Ⅲ	「被解放的堂・吉訶德」(ソ聯 ルナチャルスキー著 署隋洛文譯 未完)	
		二心	Ⅱ	新的「女將」(11月20日「北斗」)	
		二心	Ⅱ	宣傳与做戏(11月20日「北斗」)	
		集拾	Ⅵ	「毁灭」和「鉄流」的出版預告	
12月		附二	Ⅵ	三閑书屋校印書籍	
		集拾	Ⅵ		
	5	二心	Ⅱ	「野草」英文譯本序	
	10	書信		曹靖華 三	
		集拾	Ⅳ	介紹德国作家版画展(12月7日「文艺新聞」)	
12月		集拾	Ⅱ	公民科歌(12月11日「十字街頭」)	
		二心	Ⅱ	知難行難(12月11日「十字街頭」)	
		集拾	Ⅱ	好东西歌(12月11日「十字	

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
	集拾附二	Ⅵ	街头」) 德国作家版画展延期举行真象 (12月14日「文艺新聞」)	
	二心	Ⅱ	几条「順、的翻譯 (12月20日「北斗」)	
	二心	Ⅱ	風馬牛 (12月20日「北斗」)	
	二心	Ⅱ	「友邦惊詫、論 (12月25日「十字街头」)	
	集拾	Ⅱ	南京民謡 (12月25日「十字街头」)	
2	集拾	I	送増田涉君归国	
3	譯十	Ⅲ	『梅令格的「关于文学史」』 (ドイツ Barin 著)	
25	二心	Ⅱ	关于小説題材の通信	
27	二心	Ⅱ	答北斗杂志社問——創作怎样才会好? ——	
28	二心	Ⅱ	关于翻譯の通信	
1932年				1932年 (民国21, 昭和7) 五十一才
1月	二心	Ⅱ	答中学生杂志社問 (1月1日「中学生」)	1月上海事変 (一・二八) おこり, 北四川路一帯が交戦状態になったため, 30日内山書店に避難。
	二心	Ⅱ	「智識労働者、万岁 (1月5日「十字街头」)	2月6日内山書店の店員鎌田誠一がつきそい, さらに英祖界の内山支店にうつりしばらく避難。(1935, 4 鎌田誠一のために墓碑銘を自ら記している) (新知書店出版 王士蔭「魯迅傳」七四)
	二心	Ⅱ	再来一条「順、的翻譯 (1月20日「北斗」)	
	二心	Ⅱ	中华民国の新「堂・吉訶徳、們 (1月20日「北斗」)	
	集拾	Ⅱ	「言詞爭執、歌 (1月5日「十字街头」)	
	集外	I	无題	
8	南腔	Ⅱ	「非所計也、	
2月22	書信	V	許寿裳 十三	
29	書信	V	李秉中 十三	
3月	集外	I	偶成	
2	書信	V	許寿裳 十四	
20	書信	V	李秉中 十四	
			魯瑞 (魯迅の母) 一	
31	集外	I	贈蓬子	
4月20	南腔	Ⅱ	林克多「苏联聞見録」序	
23	書信	V	曹靖华 四	
24	三閑	Ⅱ	序言	

執年月日	筆日	書名	種類	題名	事項
	26	二心	II	做古文和做好人的秘訣 ——夜記之五——	5月共産党地下組織が破壊され、瞿秋白は茅盾の家に一時のがれる。この頃より魯迅と瞿秋白との文通しげくなる。魯迅は瞿秋白にソ聯の出版物をつぎつぎ送り、瞿秋白はこれらマルクス主義の文芸理論を訳出。1936.6月魯迅によって編輯された「海上述林」の一部分となる。（中国青年出版社 王士菁「魯迅」42）
	29	三閑	III	魯迅譯著書目	
	30	二心	II	序言	
5月3		書信	V	李秉中 十五	
4		集拾	II	我对于「文新」的意見	
6		南腔	II	我們不再受騙了	
6月5		書信	V	台静农 五	
18		書信	V	台静农 六	
24		書信	V	曹靖华 五	
7月		譯十	III	「士敏土」（ソ联グラトコフ作、董紹明ら訳）代序	
	5	書信	V	曹靖华 六	9月状勢が陰悪になったため、瞿秋白を北四川路の家にかくまう。後瞿秋白は中共江蘇省委機關に移ったが、党の地下組織がふたたび破壊されたため、また魯迅の家にもどる。12月中央機關にうつる。（中国青年出版社 王士菁「魯迅」42）
	11	集外	I	一二八战后作	
	20	集外	II	「淑姿的信」序	
8月1		書信	V	許寿裳 十五	
15		書信	V	台静农 七	
9月9		南腔	III	「豎琴」（ソ联の短篇小説十編を収める魯迅、柔石、曹靖华共訳）前記	
	10	譯八	III	「豎琴」及后記	
	11	書信	V	曹靖华 七、蕭三 一	
	12	書信	V	許寿裳 十六	
	18	譯八	III	「一天的工作」（ソ联短篇小説十編を収める。魯迅、文尹共訳）及前記	
	19	訳八	III	「一天的工作」后記	10月「*第三種人、を論ず」を書き、蘇汶（杜衡）の「*文新、（文芸新聞）と胡秋原の文芸に関する論辯」（7月1日「現代」に発表）を批判。 蘇汶が低俗な形式と抹殺した連環図画を文芸の大衆化のなかで、その価値をみるとめて「*連環図画、辯護」を書く。 11月母重態の知らせで北京に赴く。 北京大学、輔仁大学、女子文理学院、師範大学、中国大学などで講演。 母快回し、月末上海に帰る。（「魯迅日記」）
10月10		南腔	II	論*第三種人、	
12		集外	I	自嘲	
25		南腔	IV	*連環図画、辯護	
11月2		集拾	II	帮忙文学与帮闲文学——在北京大学讲——	
	3	書信	V	許寿裳 十七	
	22	集拾	II	今春の两种感想——在北平輔仁大学讲——	
12月		集外	I	教授杂詠四首	
		集外	I	所聞	
		集外	I	无題二首	
		集外	I	无題	
		集外	I	答客誚	

執年 月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	10	南腔	Ⅱ	辱罵和恐吓決不是战斗 ——致「文学月报」編輯的 一封信——	<p>1933年（民国22，昭和8）五十二才</p> <p>1月蔡元培，宋庆齡，楊銓ら發起人となつた「中国民権保障同盟」に参加，執行委員にあげられる。（許寿裳「魯迅先生年譜」）</p> <p>この頃より「申報」の「自由談」の欄に短評をつぎつぎと発表する。</p> <p>2月17日蔡元培の迎えて，宋庆齡宅に行きスメドレー・揚杏佛(銓)，林語堂らとともに，来華中のバーナードショーに会う。（「魯迅日記」）</p> <p>ふたたび瞿秋白をひそかに自宅に滞在させる。（許广平「魯迅回忆录」）</p> <p>一とき咳がひどく，発熱して，医師の注意をうける。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」）</p>
	12	書信	V	曹靖华 八	
	14	南腔	Ⅱ	「自选集」自序	
	16	两地	Ⅱ	序言	
	21	書信	V	王誌之 一	
	30	南腔	Ⅱ	祝中俄文字之交	
1933年		集拾	I	贈鄒其山	
1月1		南腔	Ⅱ	听説夢	
	2	書信	V	李小峰 四	
	9	書信	V	王誌之 二	
	24	偽自	Ⅱ	覓斗	
	24	偽自	Ⅱ	逃的辯护	
	26	集外	I	二十二年元旦	
	26	集外	Ⅱ	贈画師	
	28	南腔	Ⅱ	論「赴难、和「逃难、 ——寄「濤声」編輯的一封信——	
	31	偽自	Ⅱ	崇実	
	31	偽自	Ⅱ	电的利弊	
2月		南腔	Ⅱ	学生和玉佛（2月16日「論語」）	
	1	書信	V	張天翼 一	
	2	書信	V	王誌之 三	
	3	偽自	Ⅱ	航空救国三願	
	3	偽自	Ⅱ	不通两种	
	5	書信	V	郑振鐸 一	
	7	南腔	Ⅱ	为了忘却的記念	
	9	偽自	Ⅱ	賭咒	
	9	偽自	Ⅱ	战略关系	
	15	偽自	Ⅱ	頌蕭	
	19	南腔	Ⅱ	誰的矛盾	
	23	南腔	Ⅱ	看肖和「看肖的人們、記 （「改造」四月号のためは じめて日本語で書く）	
	25	偽自	Ⅱ	对于戦争の祈禱——讀書心得——	
	28	南腔	Ⅱ	「肖伯納在上海」（当時上	

執年 年月日	筆 月日	書 名	種 類	題 名	事 項
				海の各国新聞がとりあげた バーナードショーに関する 記事, 評論を編輯したもの。 瞿秋白編譯) 序	
3 月		集外	I	題「呐喊」	3 月27日 狄思威路 に家を 借りて 蔵書を移す。(雪草「魯迅先生年譜」)
		集外	I	題「彷徨」	
		集拾	II	文壇秘訣十條(3 月20日 「申報」「自由談」)	1 日魯迅日記に「内山夫人と東照里に部屋をみに行く」とあり、瞿秋白夫妻が北四川路の東照里に、難を避けてある日本人の住む家の一間を借りて落着く。日常生活の用は許廣平が代行。
	2	偽自	II	从諷刺到幽默	瞿秋白はしばらくの間比較的生活の安定を得て、「王道詩話」他十篇の文章を書き、魯迅の名で発表。(左欄*印のもの)
	2	偽自	II	从幽默到正經	(許廣平「魯迅回忆录」)
	4	南腔	II	由中国女人的脚推定中国人 之非中庸又由此推定孔夫子 有胃病——「学匪、派考古 学之一——	
	5	南腔	II	我怎么做起小说来	
	5	偽自	II	王道詩話*	
	7	偽自	II	伸冤*	
	9	偽自	II	曲的解放*	
	12	偽自	II	文学上的折扣	
	14	偽自	II	迎头經*	
	15	偽自	II	「光明所到……」	
	20	偽自	II	止哭文学	
	21	偽自	II	「人話」	
	22	偽自	II	出賣灵魂的秘訣*	
	22	集拾	II	英譯本「短篇小说选集」自序	
	28	偽自	II	文人无文	
	30	偽自	II	最艺术的国家*	
4 月 1		偽自	II	现代史	4 月施高塔路(現在の山陰路)大陸新村九号に移転。(人民文学出版「魯迅全集」所収著訳年表)
	2	偽自	II	推背图	瞿秋白の家にますます近くなり、親密に往来する。瞿秋白は深く魯迅を理解し得て「魯迅杂感選集」を編む。
	10	偽自	II	「杀錯了人」異議	「同志小林的死を聞いて」(岩波書店「魯迅選集」第十二卷所収)を「プロレタリア文学」1933年4・5合併号に発表。
	10	偽自	II	中国人的生命圈	(手塚英孝「小林多喜二」に「魯迅の弔詞」としてあり、おそらく電文ではないかといわれているが未詳)
	11	偽自	II	内外*	
	11	偽自	II	透底*	
	11	南腔	II	关于女人*	
	11	南腔	II	真假堂吉訶德*	
	17	偽自	II	「以夷制夷」	
	17	偽自	II	言論自由の界限	
	24	偽自	II	大觀園的人才*	
	29	偽自	II	文章与題目	
	29	偽自	II	新葯	



執年 年月日	筆 日	書名	種類	題名	事項
5月		集拾附二	Ⅲ	「文艺連丛」——的开头和現在——	5月13日ドイツ領事館に行き、ファシストの暴行に対する抗議文を提出する。（雪葦「魯迅先生年譜」）
	4	書信	V	黎烈文 一二	
	5	僞自	Ⅱ	ゝ多難之月、	
	6	僞自	Ⅱ	不負責任的坦克車	
	6	僞自	Ⅱ	从盛宣怀說到有理的压迫	
	9	書信	V	邹韬奋 一	
	13	集拾	Ⅲ	「不走正路的安得倫」（ソ联ネヴェロフ作, 曹靖华譯）小引	
	15	僞自	Ⅱ	王化	
	16	僞自	Ⅱ	天上地下	
	17	僞自	Ⅱ	保留	
	17	僞自	Ⅱ	再談保留	
	18	僞自	Ⅱ	ゝ有名无实、的反駁	
	18	僞自	Ⅱ	不求甚解	
	25	書信	V	周茨石 一	
	27	集拾	Ⅲ	譯本高尔基「一月九日」（曹靖华譯）小引	
	29	南腔	Ⅱ	「守常全集」題記	
	31	南腔	Ⅱ	談金聖嘆	
6月		集外	I	无題	
		集外	I	悼丁君	
	3	書信	V	曹聚仁 一	
	4	南腔	Ⅱ	又論 ゝ第三种人、	
	5	集拾	Ⅱ	兩封通信——复魏猛克——	
	8	准風	Ⅱ	夜頌	
	8	准風	Ⅱ	推	
	11	南腔	Ⅱ	ゝ蜜蜂、与 ゝ蜜、	
	12	南腔	Ⅱ	經驗	
	13	南腔	Ⅱ	諺語	
	15	准風	Ⅱ	二丑艺术	
	15	准風	Ⅱ	偶成	
	16	准風	Ⅱ	談蝙蝠	
	16	准風	Ⅱ	ゝ抄靶子、	
	18	書信	V	曹聚仁 二	6月18日楊銓（民権保障同盟副会長）暗殺される。万国殯儀館でいとなまれた葬儀に身の危険をかえりみず参加。（許寿裳「魯迅先生年譜」）旧詩「楊銓を悼みて」「三義塔に題す」をつくる。
	20	書信	V	唐訶 一	
	21	集外	I	悼楊銓	
	21	集外	I	題三义塔	
	26	准風	Ⅱ	ゝ吃白相飯、	

執 年	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	26	准風	Ⅱ	华德保粹优劣論	<p>7月瞿秋白編「魯迅杂感选集」を出版。</p> <p>東照里から引越して行った瞿秋白を7月下旬に三たび自宅にかくまう。(許广平「魯迅回忆录」)</p>
	28	准風	Ⅱ	华德焚書异同論	
	30	集拾	Ⅱ	我的种痘	
7月		集外	I	贈人 二首	
	3	准風	Ⅱ	我談「望民、	
	5	准風	Ⅱ	序的解放	
	6	書信	V	罗清楨 一	
	7	南腔	Ⅱ	大家降一級試試看	
	8	准風	Ⅱ	別一个窃火者	
	8	書信	V	黎烈文 三	
	11	書信	V	曹聚仁 三, 魯瑞 二	
	12	准風	Ⅱ	智識过剩	
	12	南腔	Ⅱ	沙	
	14	書信	V	黎烈文 四	
	18	書信	V	罗清楨 二	
	19	僞自	Ⅱ	前記	
	20	僞自	Ⅱ	后記	
	20	准風	Ⅱ	詩和豫言	
	24	准風	Ⅱ	「推」的余談	
	25	准風	Ⅱ	查旧帳	
	28	准風	Ⅱ	晨涼漫記	
	29	南腔	Ⅱ	給「文学社」信	
8月		集拾	Ⅱ	娘儿們也不行(8月21日「申報」「自由談」)	
		集拾	Ⅱ	辯「文人无行」。(8月「文学」)	
	1	旧全补	Ⅳ	关于連環图画	<p>「文学」(月刊) 発刊され, 同人となる。</p> <p>他に巴金, 郁达夫, 鄭振鐸, 張天翼, 叶紹鈞, 王統照, 顧颉剛ら。</p> <p>伍实の名で, 事実反して魯迅を誹謗した傅东华の文章(「文学」一卷二期)に怒って脱退。</p>
	1	書信	V	胡今虚 一	
	2	南腔	Ⅱ	关于翻譯	
	3	書信	V	黎烈文 五	
	4	准風	Ⅱ	中国的奇想	
	4	准風	Ⅱ	豪語的折扣	
	6	准風	Ⅳ	「一个人的受难」(連環图画) 序	
	6	南腔	Ⅱ	祝「濤声」	
	10	准風	Ⅱ	踢	
	10	准風	Ⅱ	「中国文壇の悲観、	
	12	南腔	Ⅱ	上海的少女	
	12	南腔	Ⅱ	上海的儿童	
	13	書信	V	董永舒 一	

執 年	筆 月 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	14	准風	Ⅱ	秋夜紀游	27日「論語一年」「小品文の危機」を書き、林語堂らの小品文運動を批判。
	14	准風	Ⅱ	〱揩油、	
	14	准風	Ⅱ	我們怎样教育儿童的？	
	14	准風	Ⅱ	为翻譯辯护	
	16	准風	Ⅱ	爬和撞	
	23	南腔	Ⅱ	〱論語一年。——借此又談 肖伯納——	
	24	准風	Ⅱ	各种捐班	
	24	准風	Ⅱ	四庫全书珍本	
	27	南腔	Ⅱ	小品文的危机	
	28	准風	Ⅱ	新秋杂識	
	28	准風	Ⅱ	帮閑法发隱	9月世界帝国主義戦争反対委員会遠東會議に参加、會議主席団名誉主席に推挙される。（人民文学出版社「魯迅全集」第十卷所収 魯迅著譯年表）
	28	准風	Ⅱ	登龙术拾遺	
	29	准風	Ⅱ	由聾而啞	
	31	准風	Ⅱ	新秋杂識 二	
9月	3	准風	Ⅱ	男人的进化	
	3	准風	Ⅱ	同意和解釋	
	5	准風	Ⅱ	文牀秋夢	
	7	准風	Ⅱ	电影的教訓	
	10	旧全补	Ⅲ	「海納与革命」(ドイツ・毗哈著、ハイネ死後七十五周年を記念して2月21日徳文の新聞誌上に載ったもの)	
	11	准風	Ⅱ	关于翻譯 上・下	10月「重三感旧」「〱感旧、以后上・下」を書き、青年の文学修養の一助に莊子と文選をすすめた施蛰存（第三種人派の小説家）の文言提唱に反論。
	14	准風	Ⅱ	新秋杂識 三	
	18	南腔	Ⅱ	九一八	
	20	准風	Ⅱ	礼	
	20	准風	Ⅱ	打听印象	
	20	南腔	Ⅱ	偶成	
	27	南腔	Ⅱ	漫与	
	27	准風	Ⅱ	吃教	
	29	書信	V	郑振鐸 二，罗清楨 三	
	30	准風	Ⅱ	喝茶	
	30	准風	Ⅱ	禁用和自造	10月「重三感旧」「〱感旧、以后上・下」を書き、青年の文学修養の一助に莊子と文選をすすめた施蛰存（第三種人派の小説家）の文言提唱に反論。
10月	1	准風	Ⅱ	看变戏法	
	1	准風	Ⅱ	双十怀古——民国二二年看十九年秋——	
	1	准風	Ⅱ	重三感旧——一九三三年忆光緒朝末——	

執年 年月日	筆 月日	書 名	種 類	題 名	事 項
	2	書信	V	郑振鐸 三	<p>版画展覽会を北四川路，老靶子路の二カ所で開く。作品は米，ソ聯，独，仏，スペイン，ポルトガル等世界各国の作品を展覽，魯迅の尽力による。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七九）</p>
	7	書信	V	胡今虚 二	
	11	書信	V	郑振鐸 四	
	12	准風	II	ゝ感旧、以后上・下	
	13	南腔	II	世故三昧	
	13	南腔	II	謠言世家	
	17	准風	II	黄禍	
	17	准風	II	冲	
	19	准風	II	ゝ滑稽、例解	
	19	准風	II	外国也有	
	20	准風	II	撲空	
	21	准風	II	答 ゝ兼示、	
	21	南腔	II	关于妇女解放	
	21	書信	V	郑振鐸 五	
	25	准風	II	中国文与中国人	
	26	書信	V	罗清楨 四	
	27	准風	II	野兽訓練法	
	27	書信	V	郑振鐸 六	
	28	集拾	III	「解放了的堂・吉訶德」（ソ 联ルナチャルスキー作 易 嘉（瞿秋白）譯）后記	
		旧全补	III	「ゝ解放了的堂・吉訶德、作 者傳略」（尾瀬敬止著）	
	30	集拾	II	「北平箋譜」序	
11月		集外	I	无題	
		譯十	III	苏联文学理論及文学批評的 現状（上田进著）	
	2	南腔	II	火	
	3	書信	V	郑振鐸 七	
	4	准風	II	反芻	
	4	准風	II	归厚	
	5	書信	V	姚克 一	
	6	准風	II	难得糊塗	
	6	准風	II	古书中寻活字汇	
	6	南腔	IV	論翻印木刻	
	7	准風	II	ゝ商定、文豪	
	7	准風	II	青年与老子	
	9	南腔	IV	「木刻創作法」序	
	10	南腔	II	作文秘訣	
	11	書信	V	郑振鐸 八	

執年 年月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	15	書信	V	姚克 二	
	20	書信	V	郑振鐸 九	
	22	南腔	II	搗鬼心傳	
	24	集外	II	选本	
	25	書信	V	曹靖华 九	
12月		集外	I	无題	
		集外	I	阻郁达夫移家杭州	
	2	書信	V	郑振鐸 十	
	4	書信	V	陳鉄耕 一	
	5	集拾	II	上海所感（1934.1.1.「大阪朝日新聞」日文は相当削除されている。中文では「上海所感」）	
	5	書信	V	姚克 三, 罗清楨 五	
	6	書信	V	吳渤 一	
	13	書信	V	吳渤 二	
	16	南腔	II	家庭为中国之基本	
	19	書信	V	何白濤 一	
	20	書信	V	徐懋庸 一, 郑振鐸 十一	
	24	書信	V	黎烈文 六	
	25	南腔	II	「总退却」序	
	26	書信	V	罗清楨 六	
	27	書信	V	台静农 八	
	28	南腔	II	答楊邨人先生公开信的公开信	揚邨人(1928年太陽社に参加,更に中国共産党に加入,1933年には「小資産階級革命文学の旗を掲げよ。を「現代」に発表)の投機的気分を批判。
	28	書信	V	王誌之 四	
	31	南腔	II	題記	
1934年					1934年（民国23,昭和9）五十三才
1月		集拾	VI	更正——致「申报」「自由談」編者——	
	5	書信	V	姚克 三	
	8	花边	II	未来的光榮	
	8	花边	II	女人未必多說謊	
	8	書信	V	何白濤 二	
	11	書信	V	郑振鐸 十二	
	17	花边	II	批評家的批評家	
	17	花边	II	漫罵	
	19	書信	V	吳渤 三	
	20	集拾	IV	「引玉集」(ソ联の版画集,魯迅自費選印)后記	

執年 月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	30	花边	Ⅱ	“京派、与“海派、	北京派と上海派の論争に関して、「“京派、と“海派、」を書く。
	30	花边	Ⅱ	北人与南人	
2月	4	花边	Ⅱ	「如此广州」讀后感	2月 1933年11月上海の芸華映画会社が突如襲撃され、破壊されてから、書店への圧迫は日に日にきびしくなり、魯迅、郭沫若、茅盾ら左聯作家の作品は禁止されその発禁書籍数は百四十九種におよんだ。翻訳書もふくまれ、ゴーリキー、ルナチャルスキー、フェージン、ファージェーフ、セラフィモヴィチ、シンクレアそれからメーテルリンク、ストリンドベリまでおよぶ。（「且介亭雑文」所収「中国文壇上の鬼魅」）
	9	書信	V	郑振鐸 十三	
	11	書信	V	姚克 四	
	15	花边	Ⅱ	过年	
	15	書信	V	台静农 九	
	20	書信	V	姚克 五	
	23	花边	Ⅱ	运命	
	24	書信	V	曹靖华 十	
	26	書信	V	罗清楨 七	
3月		且介	Ⅱ	关于中国的兩三件事（載1934「改造」3月号 日文譯では「火・王道・監獄——二三の支那のことについて——」）	
		且介	Ⅱ	答国际文学社問	
	6	書信	V	姚克 六	
	7	花边	Ⅱ	大小騙	
	10	准風	Ⅱ	前記	
	14	集拾	Ⅳ	「无名木刻集」序	
	15	書信	V	姚克 七	
	16	集外	I	报載患腦炎戏作	
	23	且介	Ⅱ	「草鞋脚」（英譯中国短篇小説集）小引	
	24	書信	V	姚克 八	
	28	書信	V	陈烟桥 一	
4月	5	花边	Ⅱ	“小童檔駕、	
	5	書信	V	陳烟桥 二，張慧 一	
	9	書信	V	姚克 九	
	12	書信	V	姚克 十，陳烟桥 三，台静农 十	
	15	花边	Ⅱ	古人并不純厚	
	17	書信	V	罗清楨 八	
	19	書信	V	陳烟桥 四	
	20	花边	Ⅱ	法会和歌劇	
	21	花边	Ⅱ	洋服的没落	
	22	花边	Ⅱ	朋友	
	24	書信	V	何白濤 三，楊霽云 一	
	26	花边	Ⅱ	清明时节	
	26	花边	Ⅱ	小品文的生机	

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
5月	30	書信	V	曹聚仁 四	5月「旧形式の採用、を論ず」を書き、大衆文芸の形式を解決する道の一つとして、旧形式の批判的利用を説く。
		集外	I	无題	
	1	書信	V	姜如瑛 一	
	2	且介	II	論「旧形式的採用、	
	6	書信	V	楊霽云 二	
	7	花邊	II	刀「式、辯	
	9	且介	IV	連環图画瑣談	
	10	花邊	II	化名新法	
	11	書信	V	王誌之 五	
	14	花邊	II	讀几本书	
	14	花邊	II	一思而行	
	14	花邊	II	推己及人	
	16	書信	V	郑振鐸 十四	
	20	花邊	II	偶感	
	22	書信	V	楊霽云 三	
	24	花邊	II	論秦理斋夫人事	
	24	花邊	II	「……、□□□□、論補	
	24	書信	V	楊霽云 四	
	27	且介	II	儒术	
	28	書信	V	罗清楨 九	
	30	且介	II	「看图識字」	
	30	花邊	II	誰在没落？	
	31	書信	V	楊霽云 五	
6月		集拾	II	玄武湖怪人（6月16日「論語」）	
		且介	IV	「木刻紀程」小引	
	2	書信	V	曹聚仁 五，郑振鐸 十五	
	3	花邊	II	倒提	
	3	書信	V	楊霽云 六	
	4	且介	II	拿来主义	
	6	書信	V	陳鉄耕 二	
	9	書信	V	楊霽云 七	
	10	且介	II	隔膜	
	11	花邊	II	玩具	
	11	花邊	II	零食	
	11	書信	V	曹靖华 十一	
	18	書信	V	台静农 十一	
	19	書信	V	曹靖华 十二	
	20	書信	V	陈烟桥 五	
	21	書信	V	郑振鐸 十六	

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
	23	花邊	Ⅱ	〃此生或彼生。	
	24	書信	V	王誌之 六	
	23	花邊	Ⅱ	正是时候	
	24	花邊	Ⅱ	論重譯	
	26	書信	V	何白濤 四	
7月		且介	Ⅱ	韦素园墓記	7月上海に〃書籍雑誌検査處。が設けられこれより刊行物の不振、作品の質的低下がはなはだしくなる。（「且介亭雜文」所収「中国文壇上の鬼魅」）
	1	且介	Ⅱ	難行和不信	
	3	花邊	Ⅱ	再論重譯	
	8	花邊	Ⅱ	〃徹底、的底子	
	8	花邊	Ⅱ	知了世界	
	10	且介	Ⅱ	买「小学大全」記	
	12	書信	V	陈鉄耕 三	
	16	且介	Ⅱ	忆韦素园君	
	17	花邊	Ⅱ	算賬	
	17	花邊	Ⅱ	水性	
	18	花邊	Ⅱ	玩笑只当它玩笑 上・下	
	20	花邊	Ⅱ	做文章	
	27	集拾	Ⅳ	「母亲」木刻画序	
	27	書信	V	何白濤 五，韓白羅 一，康歿 一	
	29	書信	V	曹聚仁 六	
8月		譯十	Ⅲ	我的文学修養（ソ联ゴルキー著）	8月瞿秋白が1932年7月「文学月報」に提出した文芸の大衆化問題は、大衆語と新文字の問題に発展し、魯迅は「門外文談」「曹聚仁先生の書信に答える」「漢字とラテン化」「中国語文の新生」などを書き、具体的な意見をのべる。
		故事	I	非攻	
		且介	Ⅱ	門外文談（8月24日～9月10日「申報」「自由談」）	
		集拾	Ⅳ	「木刻紀程」告白	
		附二			
		譯十	Ⅲ	贈「新語林」詩及致「新語林」讀者辭（オーストリア、莉莉・珂貝作）	
	1	且介	Ⅱ	忆刘半农君	
	2	且介	Ⅱ	答曹聚仁先生信	
	5	書信	V	郑振鐸 十七	
	6	花邊	Ⅱ	看书瑣記 一・二	
	7	且介	Ⅱ	从孩子的照相説起	
	13	花邊	Ⅱ	趋时和复古	
	13	花邊	Ⅱ	安貧乐道法	
	13	書信	V	曹聚仁 七	
	14	花邊	Ⅱ	奇怪 一・二	
					23日友人が逮捕されたため、千愛里に避難（許寿裳「魯迅先生年譜」，「魯迅日記」）



執 年	筆 月	日	書 名	種 類	題 名	事 項
	19		花邊	II	迎神和咬人	
	22		花邊	II	看书瑣記 三	
	22		花邊	II	ゝ大雪紛飛、	
	23		花邊	II	汉字和拉丁化	
	29		且介	II	不知肉味和不知水味	
	31		書信	V	姚克 十一	
9 月			譯十	III	「鼻」(ロシア, ゴーゴリ著) 署許遐譯)	9 月18日家に戻る。(「魯迅日記」)
			譯十	III	「果戈理私観」(立野信之 著, 署邓当世譯)	16日魯迅, 茅盾により「譯文」創刊。魯 迅編輯, 第4 期から黄源編輯。許遐の筆 名でゴーゴリの「鼻」「ゴーゴリ私観」 などを訳出。翌年9 月(13期)に至り停 刊。
			譯十	III	「艺术都会的巴黎」(ドイ ツ George Grosz 著, 署茹 純譯)	
	20		花邊	II	莎士比亚	
	24		且介	II	中国語文的新生	
	25		且介	II	中国人失掉自信力了嗎	
	29		集外	I	秋夜有感	
	25		花邊	II	商賈的批評	
	25		花邊	II	中秋二願	
	25		花邊	II	考場三醜	
	30		且介	II	ゝ以眼还眼、	
10月			集拾	II	勢所必至, 理有固然	
			集拾	II	做 ゝ杂文、也不易	
			譯八	III	「山民牧唱」(スペイン Pio Baroja 著及「山民牧 唱序」譯后附記(10月16日 「譯文」)	
			譯十	III	「描写自己」(フランス ジイド著)	
			譯十	III	「説述自己的紀德」(石川 湧著)	
			譯十	III	「饑饉」(ロシア, サルテ ィコフ著, 署許遐譯)	
	1		花邊	II	又是 ゝ莎士比亚、	
	1		書信	V	罗清楨 十	
	2		花邊	II	点句的难	
	4		且介	II	説 ゝ面子、	
	9		書信	V	張懸 二, 蕭軍、蕭紅 一	
	14		書信	V	曹靖华 十三	
	16		准風	II	后記	

執年	筆日	書名	種類	題名	事項
	21	書信	V	羅清楨 十一, 叶紫 一	11月10日風邪をひいて発熱。のちしばらく微熱がとれず, 病後は入れ歯があわなくなってしまうほど痩せる。(「魯迅日記」)
	23	且介	II	运命	
	24	書信	V	沈振黄 一	
	25	花边	II	奇怪 三	
	26	書信	V	曹靖华 十四	
	31	且介	II	臉譜臆測	
	31	書信	V	刘焯明 一	
11月		譯八	III	「会友」譯后附記(11月16日「譯文」)	
	1	花边	II	略論梅兰芳及其他 上・下	
	1	書信	V	寶隱夫 一	
	2	且介	II	隨便翻翻	
	6	且介	II	拿破与隋那	
	14	且介	II	答「戏」周刊編者信	
	18	且介	II	寄「戏」周刊編者信	
	18	書信	V	魯瑞 三	
	19	花边	II	罵杀与捧杀	
	19	書信	V	李霽野 十三	
	21	且介	II	中国文壇上的鬼魅	
	25	花边	II	讀書忌	
	28	書信	V	刘焯明 二	
12月		集拾	VI	給「戏」周刊編者的信	
		集拾附二	IV	重印「十竹斎箋譜」説明	
	9	且介	II	关于新文字	
	11	且介	II	病后杂談	
	16	書信	V	楊霽云 八	
	17	且介	II	病后杂談之余——关于「舒憤懣」——	
	18	書信	V	金壁野 一, 李樺 一	
	20	集外	II	序言	
	20	書信	V	楊霽云 九	
	21	且介	II	阿金	
	25	書信	V	赵家璧 一	
	26	且介	II	論俗人应避雅人	
	27	書信	V	郑振鐸 十八	
	28	書信	V	张慧 三, 曹靖华 十五	
	29	且介	II	河南卢氏曹先生教澤碑文	
	30	譯八	III	「促狹鬼萊哥羌台奇」譯后附記	

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
30	且介	Ⅱ	附記	1935年（民国24，昭和10）五十四才
31	書信	V	刘煒明 三	
1935年				
1月4	書信	V	李樺 二	
6	書信	V	曹靖华 十六	
8	書信	V	鄭振鐸 十九	
9	書信	V	鄭振鐸 二十	
15	書信	V	曹靖华 十七	
16	且介二	Ⅱ	叶紫作「丰收」序	
18	書信	V	唐訶 二 段干青 一、賴少麒 一	
24	旧全10	Ⅱ	「小説旧聞鈔」再版序言	2月ゴーゴリの「死せる魂」の翻訳にかか る。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」 七七）
25	且介二	Ⅱ	隱士	
26	且介二	Ⅱ	＊招貼即址、	
29	書信	V	楊霽云 十、蕭軍、蕭紅 二	
2月	譯八	Ⅲ	「少年別」譯后附記（2月 16日「譯文」）	
4	書信	V	楊霽云 十一、李樺 三	
9	書信	V	蕭軍、蕭紅 三	
10	書信	V	楊霽云 十二	
14	書信	V	金肇野 二、吳渤 四	
15	且介二	Ⅱ	書的还魂和赶造	
28	且介二	Ⅱ	漫談 ＊漫画、	4月「人生字を識るはあいまいの始めなり」
28	且介二	Ⅱ	漫画而又漫画	
3月	集拾	Ⅱ	驢月亮（3月5日「太白」）	
2	且介二	Ⅱ	「中国新文学大系」小説二 集序	
5	且介二	Ⅱ	内山完造作「活中国的姿态」 序	
6	書信	V	赵家璧 二	
7	且介二	Ⅱ	＊寻开心、	
13	書信	V	陈烟桥 六	
15	書信	V	羅清楨 十二	
16	且介二	Ⅱ	非有复譯不可	
16	且介二	Ⅱ	論諷刺	4月「人生字を識るはあいまいの始めなり」
21	且介二	Ⅱ	从 ＊別字、説开去	
28	且介二	Ⅱ	田軍作「八月的乡村」序	
30	書信	V	鄭振鐸 二十一	
31	且介二	Ⅱ	徐懋庸作「打杂集」序	
4月	集拾	Ⅱ	＊某、字的第四义（4月20	

執年 年月日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
		集拾	Ⅱ	日「太白」) `天生蜜性。——为`江浙人、所不懂的——（4月20日「太白」)	を書き、`生きている人の口から、生命ある語彙をとり入れ、紙の上にうつすべきだ、とのべ、文芸の大众化を説く。
	2	且介二	Ⅱ	人生識字胡塗始	
	2	書信	V	黄源 一	
	4	書信	V	李樺 四	
	10	書信	V	曹聚仁 八	
	14	且介二	Ⅱ	`文人相輕、	
	14	且介二	Ⅱ	`京派、和`海派、	
	19	書信	V	唐弢 二	
	22	且介二	Ⅱ	鎌田誠一墓記	
	23	且介二	Ⅱ	弄堂生意古今談	
	23	書信	V	曹靖华 十八	
	23	且介二	Ⅱ	不应该那么写	
	29	且介二	Ⅱ	在现代中国的孔夫子	
5 月		集拾	Ⅱ	死所（5月20日「太白」)	
		集拾	Ⅱ	中国的科学資料——新聞記者先生所供的——（5月20日「太白」)	
		集拾	Ⅱ	`有不為菑、（5月20日「太白」)	
	3	且介二	Ⅱ	六朝小説和唐代傳奇文有怎样的区别？—答文学社問—	
	3	且介二	Ⅱ	什么是`諷刺、？——答文学社問——	
	5	且介二	Ⅱ	論人言可畏	
	5	且介二	Ⅱ	再論`文人相輕、	
	22	書信	V	曹靖华 十九，邵文鎔 二	
	24	書信	V	陈烟桥 七	
	25	書信	V	赵家璧 三	
	28	書信	V	黄源 二	
6 月		集拾	Ⅱ	兩種`黄帝子孙、（6月20日「太白」)	6月18日瞿秋白は蔣介石国民党により、福建汀州で殺害される。
	4	且介二	Ⅳ	「全国木刻联合展覽会專輯」序	
	6	且介二	Ⅱ	文壇三戸	
	6	且介二	Ⅱ	从帮忙到扯淡	
	9	且介二	Ⅱ	「中国小説史略」日本譯本序	

執 年 月 日	筆 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	10	且介二	II	＊題未定。草一・二・三	
	16	書信	V	李樺 五	
	24	書信	V	曹靖華 二十	
	29	書信	V	賴少麒 二，唐英偉 一	
7月		譯四	III	「錶」（ソ聯 パンテレエ フ作）及譯者的話	
	1	且介二	II	名人和名言	
	1	且介二	II	＊靠天吃飯、	
	14	且介二	II	几乎无事的悲劇	
	15	且介二	II	三論 ＊文人相輕、	
	30	書信	V	黃源 三	
8月		譯十	III	「戀歌」（ルーマニア，索 陀威奴著）	
	8	譯四	III	「俄羅斯的童話」（ソ聯 グリキー作）及小引	
	13	且介二	II	四論 ＊文人相輕、	
	14	且介二	II	五論 ＊文人相輕、	
	16	且介二	II	＊題未定。草五	
	23	且介二	II	論毛筆之類	
	23	且介二	II	逃名	
	26	書信	V	唐弢 三	
9月		譯十	III	「村婦」——（歴史的插 話）——（ブルガリア 代 佐夫著）	
		集拾	II	聚 ＊珍、（9月5日「太白」）	
	8	集拾	VI	給「譯文」編者訂正的信	
	9	書信	V	李樺 六	
	12	且介二	II	六論 ＊文人相輕、——二爽	10月瞿秋白訳著「海上述林」上下巻の編輯 校訂に着手，出版。広告も みづから 書 く。（許广平「魯迅回忆录」）
	12	且介二	II	七論 ＊文人相輕、——兩伤	
	15	譯四	III	「坏孩子和別的奇聞」（ロ シア チェホフ作）及譯者 前記・后記	
	16	集拾	III	「譯文」終刊号前記	
	20	書信	V	台静农 十二，蔡斐君 一	
11月		譯九	III	「死魂灵」（ゴーゴリ作， 1936. 5. 15. 第二部第三章ま で譯了，未完）	11月魯迅の身体はますますそこなわれて衰 弱，友人たちはしきりに国外へ療養に行 くことをすゝめたが，魯迅は中国を離れ ることを欲しなかった。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七九）
		故事	I	理水	
	5	書信	V	王治秋 一	
	14	且介二	II	蕭紅作「生死場」序	

執 年	筆 月 日	書 名	種 類	題 名	事 項
	15	書信	V	台靜農 十三	
	18	書信	V	王治秋 二	
	20	且介二	II	陀思妥夫斯基的事（三笠書 房の「ドストエフスキー全 集」普及本のために作る）	
	23	書信	V	邱遇 一	
	25	且介二	II	孔另境編「当代文人尺牘鈔」 序	
	25	書信	V	叶紫 二	
12月		故事	I	采薇	
		故事	I	出关	
		故事	I	起死	
		集外	I	亥年殘秋偶作	
	2	且介二	II	雜談小品文	
	3	書信	V	台靜農 十四	
	4	書信	V	王治秋 三	
	7	書信	V	曹靖華 二十一	
	14	書信	V	周劍英 一	
	18	且介二	II	*題未定、草六・七・八・九	
	21	書信	V	台靜農 十五	
	22	書信	V	叶紫 三	
	23	且介二	II	論新文字	
	24	且介二	IV	「死魂靈百圖」小引	
	26	故事	II	序言	
	29	花邊	II	序言	
	29	書信	V	王治秋 四	
	30	且介	II	序言	
	30	且介	II	附記	
	31	且介二	II	序言	
	31	且介二	II	后記	
1936年					1936年（民國25，昭和11）五十五才
1月		且介	II	文人比較學	1月友人と共編「海燕」半月刊創刊。
		末附			
		且介	II	大小奇蹟	
		末附			
		且介	II	難答の問題	
		末附			
		且介	II	登錯的文章	
		末附			
	5	書信	V	曹靖華 二十二	

執筆年月日	書名	種類	題名	事項
9	書信	V	叶紫 四	
18	書信	V	王治秋 五	
28	且介末	IV	「凱綏・珂勒惠支版画選集」序目	
2月1	書信	V	黎烈文 七	
10	書信	V	黃萍蓀 一，曹靖華 二十三	
15	書信	V	阮善先 一	
17	且介末	IV	記蘇聯版画展覽會	
17	書信	V	徐懋庸 二	
19	書信	V	夏傳涇 一	
21	書信	V	曹聚仁 九，徐懋庸 三	
23	且介末	II	我要騙人（1936年「改造」4月号に日本文で書く。題名は「わたしは人をだましたい」）	3月発作的にせきがひどくなり，病床につく。「譯文」復刊。翌年6月（新3巻第4期）に至り再び停刊。
3月	譯九	III	「死魂灵」第二部第一章譯后附記（3月16日「譯文」）	
8	且介末	III	「譯文」復刊詞	
10	集拾	IV	「城与年」插图本小引	
11	且介末	II	白莽作「孩儿塔」序	
(下旬)	且介末附	III	「海上述林」（瞿秋白の譯文集）上卷序言	
21	書信	V	曹白 一	
26	書信	V	曹白 二	
4月1	且介末附	II	我的第一个师父	
1	書信	V	曹白 三	4月安静ののち，経過は良く，病状はやゝ好転したように見える。と自ら良友図書館に出かけて，ソ聯版画を選定する。
2	書信	V	赵家璧 四，杜和鑾・陈佩骥 一，顔黎民 一	5月病状ふたたび悪化し，三十八度を下らない。食欲全くなく，米国の結核専門医D医師は「もし欧州人ならばもう生きてはいまい」といったという。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七九）
4	且介末	II	写于深夜里	6月7日「文芸家協会」が結成されたが魯迅は加入しない。加入者は郭沫若、茅盾、徐懋庸、郁达夫、沙汀、謝冰心、艾蕪、林林その他。 別に間もなく発せられた「文芸工作者宣言」に署名。署名者は巴金、曹禺、茅盾、蕭紅、周而复、田間、靳以ら67名。 「トロッキー派に答える手紙」を書き
6	書信	V	曹白 四	
11	且介末	II	續記	
15	書信	V	顔黎民 二	
16	且介末	II	三月的租界	
30	且介末	II	「出关」的「关」	
(末)	且介末附	III	「海上述林」下卷序言	
5月	譯九	III	「死魂灵」第二部第二章譯后附記（5月16日「譯文」）	
4	書信	V	曹白 五	

執年 月	筆日	書名	種類	題名	事項
	8	書信	V	曹白 六, 李霽野 十四	トロッキー派を批判。
	22	書信	V	唐弢 四	＊民族革命戦争の大衆文学、というスローガンの提出を胡風に依頼。ところが
6月	9	且介末附	II	答託洛斯基派的信	胡風の書いた論文が周揚一派の提出したスローガンである＊国防文学、と正面より対立した形となって紛糾。
	10	且介末附	II	論現在我們的文学运动——病中 答訪問者, O. V. 笔录——	10日O. V. (馮雪峰)を招いて「現在のわれわれの文学運動を論ず」を口述記録させて、胡風論文の不充分を補い、曲解を正し、新しい歴史段階における文学運動のあり方について、自己の真意をあきらかにする。
	23	且介末附	IV	「苏联版画集」序	病状はますます悪化、起きて坐ることさえ苦痛になる。
7月		集拾附二	IV	題「凱綏・珂勒惠支版画选集」贈季葦	スメドレー、宋庆齡に入院、転地療養を強くすすめられたが、上海を離れることを望まなかった。(新知書店出版 王士菁「魯迅傳」七九)
		且介末附	II	半夏小集 (10月「作家」に発表)	8月＊文艺家協会、に加入していない魯迅たちに挑戦する徐懋庸らに対し「徐懋庸に答え、併せて抗日統一戦線の問題について」を書き、彼らのセクト主義を批判さらに文壇上にはびこる卑劣な傾向を烈しく攻撃。それ以後上海文壇では二つのスローガンをあらそう議論は影をひそめる。
	6	書信	V	母亲 四	
	7	書信	V	赵家壁 五	
	11	書信	V	王治秋 六	
	21	且介末	III	捷克譯本	
8月	2	書信	V	曹白 七, 沈雁冰 一	
	3	且介末	II	答徐懋庸并关于抗日統一戦綫問題	
	7	書信	V	曹白 八	
	15	集拾	II	答世界社問：中国作家对于世界語の意見	
	16	書信	V	沈雁冰 二	
	23	且介末附	II	＊这也是生活、…………	
9月		且介末附	II	＊立此存照、一・二 (9月5日「中流」)	
	3	書信	V	魯瑞 五, 沈雁冰 三	
	5	且介末附	II	死	9月「死」を書き、死後のことなど書きつづる。
	19	且介末附	II	女吊	
	22	書信	V		
	25	書信	V	魯瑞 六, 許寿裳 十八	
	28	書信	V	黎烈文 八	
10月		且介末附	II	＊立此存照 三・四・五 (10月5日「中流」)	10月初、病氣はよくなったようにみえ、体重は四十キロ弱で八月より一キロ増す。
		且介末附	II	＊立此存照、六・七 (10月20日「中流」)	8日青年会の催した第二次全国木刻流動展覽会に出かけて行く。青年にとりま



執年 月日	筆 書名	種 類	題 名	事 項
	集拾	Ⅱ	答世界社信（10月「世界」）	かれて欲談する。
	集拾	Ⅲ	紹介「海上述林」上巻（10	その後の一兩日後に上海大戲院にプー
	附二		月「作家」「中流」）	シキンの小説にもとづいた映画「トボロ
6	書信	Ⅴ	曹白 九	フスキー」をみに行きたのしげな様子が
8	旧全補	Ⅳ	第二次全国木刻聯合流动展	みえた。
	続附		覧会上的談話(陈烟桥記録)	17日さらに出掛けて、鹿地亘、内山完
9	且介末	Ⅱ	关于太炎先生二三事	造を訪う。
12	書信	Ⅴ	宋琳 一	18日午前三時せきの発作が再発し、午
15	書信	Ⅴ	曹白 十	前六時半医師を呼ぶ。
16	且介末	Ⅲ	曹靖华譯「苏联作家七人集」	19日前日より牛乳百瓦をとったのみ。
			序	呼吸困難心臓の圧迫感きびしく、眠りは
17	且介末	Ⅱ	因太炎先生而想起的二三事	つねにさまたげられ、終夜冷汗は淋漓と
	且介	Ⅱ	后記（1937年6月25日許广	流れ、体温が下降、午前五時二十分つい
	末附		平記）	に心臓麻痺により永眠。（新知書店出版
				王士菁「魯迅傳」七九）
				同日遺体は万国殯儀館に移された。
				20日から一般市民の弔問をうける。
				共産党は国民党に国葬要求を通電。
				22日棺は白地に黒々と「民族魂」と書
				かれた旗で覆れ、深く沈んだ哀しい歌声
				のうちに、蔡元培、宋庆齡、黄源、歐陽
				山胡風、巴金、張天翼、鹿地亘、内山完
				造たちにみまもられて、万国公墓に葬ら
				れる。（新知書店出版 王士菁「魯迅傳」
				七九）